

『岩の上の影』論：時・空の観点からの一考察

梶田 隆宏

(人文学部国際社会コミュニケーション学科)

(A Study of Shadows on the Rock : A Consideration from the Viewpoint of Time and Place)

Takahiro MASUDA

(一)

自他ともに許すキャザーの「最高傑作」と言えば『大司教に死は来る』¹⁾のみであるが、この大作が世に出たのは一九二七年(五十四歳の年)である。しかしこの記念すべき年は、彼女の「運命の変転」を告げる不吉な年でもあった。というのも、この年を境に彼女の身の上に不幸な出来事が次々と降り懸かることになるからである。まず第一に、都市計画による地下鉄敷設のために、永年住み慣れたニューヨーク市バンク街五番地のマンションを退去せざるを得なくなるが、この「古い家」は彼女が作家として最も充実していた十五年の歳月を過ごした所である。『教授の家』が象徴的に示しているように、人生で「最良の時」を過ごした^{すなわ}住処を失うことは、彼女にとって深刻な打撃であった。

第二に、翌年の一九二八年三月、最愛の父チャールズが心不全で死去する(享年八十)。彼はヴァージニアから中西部のネブラスカに移住後も、南部訛りが抜けず、栄達や金儲けとは無縁の穏やかな田舎紳士であった(ウッドレス 二十八)、と言われている。父親を深く愛していたキャザーにとって、その死は大変な衝撃であった(ウッドレス 四一三-四一四)。ルイス(一九〇八年以来キャザーと生涯を共にした盟友)は『生きているウィラ・キャザー 個人的記録』の中で、“It was a great shock to her — not only the personal loss, but her realization of the changes it foreshadowed. There had always been the kindest and fondest relationship between her and her father : and his gentle, modest pride in her achievements, and the high esteem they had won, were one of the chief satisfactions she got from what is known as success” (一五二)と述べている。独りになった母親のヴァージニアは、弟のダグラスに引き取られてカリフォルニアに転住し、郷里の家は無人人となる。これは、一族の要であった実家の崩壊を意味するものである。

第三に、カリフォルニアに転住してから僅か数か月後の一九二八年十二月、母親(七十八歳)が卒中で倒れて半身不随と重度の言語障害を併発し、バサデナの療養所で寝たきりとなる。そのため、キャザーは病母の見舞いと看護のために、アメリカ大陸を横断(ニューヨーク⇄カリフォルニア)する大変な長旅を繰り返し、経済的にも援助するが、母親は三年にわたる闘病生活の末、一九三一年八月死去する。もともとヴァージニアは南部の紳士階級に属する名家の出で、結婚前の職業は学校の教師(早世した父の職業は国会議員)。たいそう気位の高い南部美人で、気性の激しい女性であった、と言われている。評伝者のウッドレスは彼女のことを“a woman of energy and force. Handsome and domineering” (二十)と述べている。それだけに、彼女の闘病生活が当人は言うに及ばず、その娘にとっても如何に悲惨であったかは、ルイスの言葉を見れば明らかである。彼女

は、“She [Willa Cather] realized with complete imagination what it meant for a proud woman like her mother to lie month after month quite helpless, unable to speak articulately, although her mind was perfectly clear. She had to watch her continually growing weaker, more ailing, yet unable to die. It was one of those experiences that make a lasting change in climate of one’s mind” (一五六) と述べている。

最初にキャザーの伝記的事実を紹介したのは、一九二七年(『大司教に死は来る』出版の年)から一九三一年(『岩の上の影』出版の年)までの五年間が彼女の人生の中で最も不幸な時期、“the most stressful and discouraging period of her entire life” (ウッドレス 四一三) であり、この時期への言及を抜きにして本論に入ることにはできないからである。キャザーの人生とその作品が密接な関係にあることは「彼女は、作家としては異常なほど自己の人生と体験を作品の中に埋め込んでいる」(xiv) というウッドレスの指摘を見ても明らかである。『岩の上の影』は、安住の家を失った上に、両親の老・病・死という非情な「時の重荷」に直面せざるを得ない段階に入った失意の作者によって、しかも遠い異境の地で苦しむ実母の惨めな闘病生活と重なる時期に執筆されたものである(執筆開始は一九二八年秋、脱稿は一九三〇年十二月二十七日 [ルイス 一五六―一六〇])。

キャザーは、親友のドロシー・フィッシャーに宛てた私信の中で「この三年間『岩の上の影』は唯一の逃げ場であった [Shadows on the Rock had been her only refuge for the past three years] (ウッドレス 四二三) と打ち明けているが、これは作者の極めて深刻な現実逃避の姿勢を示すものであり、ひいては本作品に対する評者の辛い評価に繋がるものである。『岩の上の影』を「灰色にして、活気に欠ける小説 [a grey and somewhat lifeless book] (トーマス 一六四―一六五) あるいは「キャザーの小説の中で最も軟弱な作品 [weakest of her books] (ゼイブル 二二一) と評する人々の言葉はその証左であり、くわえて「本作品には火は全くないし、エネルギーもほとんどない [the book had no fire at all and almost no energy] (ウッドレス 四二三) と言い切る作者自身の言葉は、その評価の確かさを裏付けるものである。本論の目的は『岩の上の影』をキャザー文学の衰退を示す後ろ向きのユートピア小説と捉え、それを時空の観点から考察することにある。

(二)

『岩の上の影』は、父を亡くして間もない失意の作者とカナダの古都ケベックとの出会いから生まれたものであり、その内容は新大陸の辺境(十七世紀末期、ニューフランスの岩山の町ケベック)と旧大陸から来た人間(名もなく美しく愛情細やかに生きる父子家庭のフランス人移住者の親子)を素材とする親孝行物語である。キャザーが初めてケベックの地を踏んだのは一九二八年六月、五十四歳の時で、彼女の避暑地があるカナダのグラン・マナン島に向かう途中のことである。

ケベックは「十七世紀初頭フランス人が開拓、十八世紀中葉にイギリス領に編入」(新村 七五八) という歴史から窺えるように、広大な非フランス的アメリカ大陸の中で孤絶する特異な都市(現在でもケベック州住民の八割以上はフランス系)である。キャザーはフランス文化の礼賛者であり、フランシス・パークマン(アメリカ大陸の開拓史を著した歴史家)の愛読者(ルイス 一五四)である。したがって、ケベックが古い歴史を持つ、フランス文化の伝承地であるぐらいのことは人並み以上に熟知していたはずである。それを重々承知しながら、長い間この地に足を運ばなかったのは「ケベック=彼女の憧れてやまない古のフランス文化とは無縁の地」と見なしていたことの証左である。キャザーが終生愛し続けた最愛の地は、一三〇九年から一三七七年まで中世カトリック世界の中心地であり、当時の面影を今に伝えるフランスの古都アヴィニオン²⁾であり、逆に彼女

が徹底的に幻滅していたのは第一次大戦後のアメリカ社会の変貌であることを指摘しておく。ルイスは「今のケベックは、彼女（キャザー）の愛するフランスとは時空に於いて、あまりにもかけ離れすぎているので、（今さら訪ねてみても）元の姿などたいして留めてはいないと思っていたのだろう [Perhaps she thought of modern Quebec as too far separated in time and place from the France she loved to have much left of its original character]」（一五一）と述べている。

にもかかわらず、一九二八年の夏（六月）になってこの地に足を向けたのは、第一に、前年には永年住み慣れた安住の家を、春には最愛の父を失ったからであり、第二に、彼女の避暑用の別荘がたまたまカナダのグラン・マナン島にあったからである。彼女に同行したルイスは、避暑地に焦がれる思い詰めたキャザーの姿を見るにつけても、この年は二人して「新しいルートを試み、どこか新しい国でも見てみる [try a new route and see some new country]」（一五三）ことにした、と述べている。と見てくれば、二人がケベック行きを計画した最大の目的がいずこにあったかは自明である。程度の差はあれ、とにもかくにも、自分の身近な世界で起こった浮き世の憂さを晴らすこと。これが、何よりも、新ルートを試みて現実逃避の避暑に出かけた二人の旅立ちの目的であった。したがって、ケベック行きはその目的のために選ばれた一手段であったに過ぎない。当初の計画ではケベックには立ち寄るだけであったが、到着早々ルイスが風邪を引いて寝込んだために、この地に十日間も逗留する羽目になった（ルイス 一五四）、という。

とはいえ、思わぬハプニングによる予定外の滞在中に、キャザーが目にした現実のケベックの姿は、この町に対する彼女の従来の見方を全面的に覆すものであった。ルイスによれば、キャザーはケベックにたいそう心を奪われ、本作品の舞台となるウルスラ会女子修道院、大聖堂、神学校、勝利の聖母教会、旧市場跡などを熱心に見て回ったり、カナダ史に関するパークマンやスコットの書物に読み耽っていた（一五三―一五五）、という。なるほどキャザーの見たケベックの姿は、前作で彼女に多大の喜びを与えたカトリシズムの世界である。しかし彼女がこの町に立ち寄ったのは、人生で最も不幸な時期を迎え、无情的な「時の重荷」に打ちひしがれていた時のことである。だとすると、ケベックがキャザーの心を捉えた最大の理由は、ここでは数百年前のフランスの古都の面影が今なお色濃く生き続けていたという点にある、と考えてよかろう。というのも、第一に、前年からこの年の夏にかけて彼女を襲った一連の不幸な出来事、つまり安住の家の喪失、父の死、実家の無人化が意味するものは、何よりも世の無常であり、第二に、憧れの古の世界が今も豊かに温存されている古都とは、換言すれば、世の無常とは無縁にどこかで時が止まっているような至福の空間であるからである。しかも、ケベックがカトリシズムに貫かれた平和な古都であるとするなら、それは彼女の崇敬する聖母マリアに守護された恵みの空間でもある。

と見てくれば、現実逃避の旅の途中で忽然と現れた美しい<異界>の発見は、キャザーにとって、まるでタイム・カプセルを潜り抜けて、浮き世の世界から古代ギリシアのアルカディア高原に降り立ったような大変な驚きであり、望外の喜びであったに違いない。この喜びを新たな創造力に変えて、浮き世で受けた心の傷を癒そうと試みたのが『岩の上の影』である。当時の作者が何よりも「時の重荷」に捉われていたことは、本作品の表題を見れば明らかである。というのも、キャザー文学に於いて「岩」とは「何か永遠なるもの、変化とは無縁の何か永続するもの」（『大司教に死は来る』 九十八）に対する人間の憧れを象徴し、本作品で言う「影」とはこの不易不動の岩の上で、限りある命を生きた人間たちのことであるからである。永遠なるものへの憧れと有限なる命の悲しみ。換言すれば、「時と永遠」（ウッドレス 四三四）。このテーマのもとで作者は一体いかなる桃源の物語を描こうとしたのであろうか。

(三)

『岩の上の影』は六巻から成る本文とエピソードから構成され、その間には十五年の時間差がある。その六巻の表題は第一巻「薬剤師」、第二巻「セシルとジャック」、第三巻「長い冬」、第四巻「ピエール・シャロン」、第五巻「フランスからの船」、第六巻「臨終の伯爵」である。最初に、<それから何年後>という形式は作家キャザーがよく用いる技法であり、その意図するところは時間の持つ深い意味を読者や語り手に認識させることにある。次に、物語の内容は、フランス領カナダにある辺境植民地ケベックという舞台設定に相応しく、フランス船の出入港を軸に展開する。本文から見てみよう。物語は「一六九七年十月のある夕暮れ近くのことである。ケベックの哲人薬剤師ユークリッド・オークレールはダイヤモンド岬の頂上に立って、眼下遠くに広がる広大で空虚な川面を見つめていた。空虚と言ったのは、祖国から来る夏船の中で、この辺境地に残っていた最後の一隻が帆を陽に輝かせながら、一時間前にケベックの下手でセント・ローレンスの流れを割いている緑の島の彼方に消え去り、故国へ向けて長い航海の途に着いたからである」³⁾ という場面から始まる。

本文は一六九七年十月から始まり、翌年の十一月で終わる。この時間設定は、何よりも「変化」を嫌う当時の作者によって意図的に選ばれたものと思われる。というのも、「この一年間は、動乱の多いケベック物語史の中でも稀に見る静かな時であり、十八世紀に勃発する戦争前の一時的な小休止であった [this year is a time of rare calm in the turbulent Quebec saga, a lull before the wars of the eighteenth century began]」(スカッグス 一四一) からである。とはいえ、この開始年は前作の『大司教に死は来る』(一八四八年開始) と比べてみても、更に一世紀半も時間を遡った時点である。この更なる過去への退行は非情な「時の重荷」に苦悩する作者の深刻な現実逃避の姿勢を象徴的に示すものであり、彼女が本作品の主人公として選んだ二人の人物はその事実を裏付けるものである。なぜなら、その二人の人物とは前作のような非凡な開拓者ではなく平凡な庶民の親子、つまり妻に先立たれたユークリッド・オークレールとその一人娘で当年十二歳のセシルであるが、この父親の人物像が作者の亡父の面影を彷彿とさせるからである。換言すれば、『岩の上の影』とは作者が「時の重荷」を感じさせない桃源の国で心の救いを求めて夢想した仮定法過去完了の物語であり、今は亡き最愛の父に捧げた鎮魂の孝行物語なのである。では、この親子について父親から具体的に見てみよう。

第一巻の「薬剤師」によれば、オークレールは町の薬剤師であると同時に、カナダ総督フロンテナック伯爵に仕える医師でもある。しかし「瘦身でひ弱そうな五十がらみの男であり、少し猫背で白髪混じりの頭をしていた」(七) という外貌と「哲人薬剤師」という呼称から窺い知ることができるように、思索型で物静かな人物であり、どこから見ても「行動の人でないことは明らか(である)」(七)。キャザー文学に於いて開拓者たる必須条件は、何をさておいても、哲学者アンリー・ベルクソンの言う「行動の人 [man of action]」(ベルクソン 一九〇) である。だとすると、オークレールは紛れもなく辺境の植民地には向かない質の人間である。その点は本人自身も素直に認めるところである。第三人称の語り手(以下簡単に語り手と呼ぶ)は、オークレールについて「実際、彼のように穏やかで思慮深い気質を持ち、都会育ちで古い慣習を墨守する男が、カナダの荒れ野にある灰色の岩山の上に立っているとは実に不思議なことであった」(四) と述べている。「名は体を表す」のがキャザー文学に見られる一つの特色であるとするなら、本作品に登場するユークリッド・オークレールの特徴と本質は、好人、善人、真の人としての彼の人物にあると言えよう。というのも、ユークリッド (Euclid) とは、語源的には「eu = (「良、好、善、真、正常」などの意を表す

連結形) + (clid=fame)」(小稲 七一六)であるからである。では何故に、このような人物がニューフランスの岩山の上に立っているのであろうか。

オークレールは、パリでフロンテナック伯爵家の隣家で生まれた。彼の生家はこの伯爵の持ち家で、一家は祖父の代から伯爵の恩顧と庇護のもとで薬種屋を営んできた。彼もまた父の跡を継いで薬剤師となった。しかし当時のフランスは、ルイ十四世下の悪政と重税の故に社会の荒廃と庶民の苦しみは増すばかりであり、くわえて両親の死後、彼の代になって家業は傾く一方で、先行きは真っ暗であった。その彼に救いの手を差し伸べてくれたのがフロンテナック伯爵である。というのも、オークレールは、七十歳の高齢ながら再度カナダ総督に任命された伯爵から、総督の任が解かれれば必ず母国に連れ戻すという条件つきで、彼の薬剤師兼医師としてニューフランス行きの誘いを受けたからである。その誘いを受けてオークレールが妻子と共に大西洋を渡ったのは、一六八九年のことである。人生は「偶然」によって左右されるというのが『教授の家』以降の作者の人生観であるが、まことに「パリでフロンテナック伯爵の隣家に生まれたという偶然が、ユークリッド・オークレールの運命を決めてしまった」(二十七)のである。しかし、あれから八年の歳月が流れ、今は十二歳の娘と寂しい二人暮らしである。というのも、良妻賢母であった糟糠の妻は、二年前に帰らぬ人となったからである。想えば、オークレールは前作の偉大な主人公ジャン・マリー・ラトゥールとは異なり、いざ渡航する段になって死ぬほど逡巡したが、健気な妻の励ましで万里の波濤を越えたのである。

母国へ向かう最終便の船が島の彼方に消えてから既に半時も経つというのに、夕暮れの岩山の頂上にただ一人悄然と佇み、眼下に広がる空虚な川面をじっと見つめる白髪混じりの男。この侘びしいオークレールの姿こそ、年とともに暮る彼の望郷の思いを示すものであり、流離の悲しみを象徴するものである。第一便のフランス船がこの岩山の町に入港するのは七月、故国に向かう最後の船が町から出てゆくのは十月である。この最終便が出航したあと、翌年の夏まで八か月間「北国の岩山の上に立つこのフランスの植民地は、ヨーロッパから、世界から完全に切り離されてしまう」(三一四)のである。オークレールが岩山の頂を去りかねて、最後の一人になるまで居残っていたのは「このように世界から隔離されていることが、年ごとに耐えがたいものとなってきた」(四)からである。しかし祖国フランスへ、懐かしい故郷のパリへ帰る夢は今年もまた潰えたのだ。なぜなら、一日千秋の思いで待ち続けていた「良き知らせ」、つまり主人の伯爵を本国へ召還する国王からの親書は今年もついに来なかったからである。オークレールは、これから冬に向かう極北の僻遠の地で「厳しい現実の生活」(三)に耐えながら、翌夏の吉報を待つしかないのである。では、この失意の男が暮らす流離の地ケベックとは一体いかなる所であり、そこで彼はどのような生活を営んでいるのであろうか。

(四)

ケベックは、フランスの北部から渡ってきたカトリック教徒の人々によって建設されたアメリカ大陸に於けるニューフランスの拠点であり、ノルマン・ゴシック風の町並みを見れば、とても異境の地に居るとは思えないほど北フランスの田舎町にそっくりである。しかし、いったん目を町の外に転ずれば、母国との違いは一目瞭然である。というのも、この岩山の町は、対岸の水際まで迫っている鬱蒼とした黒松の森と、足を踏み入れたが最後、生きては帰れない人跡未踏の原始林に取り囲まれ、町と外界を繋ぐ道はセント・ローレンス川以外に何もないからである。

町の人口は二千人足らずで、その頂点に立つのは総督と司教である。「山の手」には総督の官邸や教会、修道院、神学校、司教館が立ち並び、そこから二百フィートほど真下にある「下町」、つ

まり岩山の麓には一般庶民の家が群集しているのは、この辺境植民地が政界と宗教界の二大指導者を頂点とするヒエラルキー社会であることを象徴的に示すものである。と同時に、作者のキャザーが中世フランス文化の心酔者であるとするなら、このヒエラルキー的住み分けに彼女の人間観が反映されているのは理の当然である。「山の手」に住む「フロンテナック伯爵とラヴァル老司教は、オークレールの世代の人々が若かりし頃に仰ぎ見た偉人」(二六一)、換言すれば、キャザーの言う開拓者の人物であるのに対して、「全く神に見放された」(五十) いかかわしい安宿「蛙屋」の女経営者、トワネット・ゴーが「下町」の住民とされているのは、その何よりの証左である。

薬種屋を営むオークレールの住居は「山の手」と「下町」を繋ぐ坂道の途中にある。彼がこの位置に住んでいるのは、フロンテナック伯爵の至急のお召しに対して迅速に対処でき、しかも町の双方の住民に対しても同じように便利であるからである。とはいえ、この岩山の町では住処の位置こそ、ヒエラルキー社会のもとで暮らす住民たちの身分や社会的地位の高低を具象的に示す象徴であると同時に、作者の人間観とも密接に繋がるものである。更に言えば、この薬種屋で日々の生活を営むオークレールとセシルの親子は、本作品で主人公を務める重要人物である。だとすると、この父子の住居が岩山の中ほどに設定されていることの意味は一体どこにあるのであろうか。考えられるのは次の三点、(1) オークレールは断じてキャザー的偉人の範疇に属する人間ではないこと、(2) オークレールは流離の身をかこちながらも、一般庶民の移住者と比べれば、物心両面ではるかに立つ生活を営んでいること、(3) 前作で見られた作者の熱烈な聖母崇敬は、本作品ではオークレールの無垢な一人娘セシルに転化されていること、換言すれば、セシルが「上の世界」と「下の世界」を取り次ぐ仲介者の人間、つまり地上の聖母的女性であること、である。では、上記の三点について順番に考えていきたい。

第一に、ユークリッド・オークレールは名実ともにキャザー的偉人とは凡そ対照的な人間であるが、それというのも、この人物像に彼女の亡父の実像が色濃く投影されているからである(ルイス一五六)。本作品が父と娘を主人公とする孝行物語となっているのは、その何よりの証左である。というのも、数か月前に最愛の父を亡くした失意の作者が、「時の重荷」を超越したような永遠の古都ケベックとの幸福な遭遇によって浮き世の憂さから解放され、亡父を偲べば偲ぶほど、彼女の思いが最終的に収斂してゆくのは生前の父の姿であり、その父と暮らした幸福な過去の日々であるからである。娘の年齢が十二歳に設定されているのは、無時間的な楽園の世界に生きる子供時代を作者が、つまり「時の重荷」に捉われた作家キャザーが、人生で最も幸福な時代と見なしていたりからである。『岩の上の影』が作者の実人生と深く関わっていることは、彼女の亡父とユークリッド・オークレールとの本質的な類似点やセシルの母親を故人として設定していることを見ても明らかである。なぜなら、作者の亡父は、オークレールと同様、アメリカ大陸の辺境地への移住者、換言すれば、流離の悲しみを知る人間であると同時に、世に言う「アメリカの夢=成功の夢」などとは凡そ無縁の非エロスの人間であったからである。本作品の執筆時期が作者の母親の悲惨な闘病期間と重なっていることは既に指摘した。では次に、第二の点、オークレール家の暮らしぶりについて見てみよう。

岩山の象徴に従えば、オークレールとセシルの住処は一般庶民の憧憬的であると同時に、そこで営まれている二人の家庭生活は町民の模範であること意味する。なぜなら、この親子の住処は「下町」の住民から仰ぎ見られる位置に設定されているからである。「移住者たちは些細な口実を設けては彼の家に立ち寄りたがった。この家の内部は、フランス生まれの人たちには故国の我が家のような気がするからである……町の人々が何かと口実を設けては薬種屋に立ち寄りたがるのも……そこで営まれている生活の質のためであった」(二十二-二十六) という語り手の言葉は、上記の解釈が正鵠を得ていることを示す証左である。換言すれば、町の住民たちが薬種屋に心を惹かれ、

頻繁に立ち寄るのは、故国を遠く離れた異境の地で、オークレール家が物心両面でフランス的なものに貫かれているからである。最初に、〈物〉の観点から見てみよう。

オークレールは、カナダ総督を務める伯爵お附きの薬剤師兼医師として渡航したので、パリの実家からは好きな物を好きなだけ持参することができた。その特典を最大限に活用したのは彼の妻である。というのも、「オークレール夫人は新生活をできるだけ昔の生活のようにする」（二十三）ことをモットーに「生活の必需品と思われる家具調度類を全て持参する」（二十三）ことができたからである。語り手は「店の後ろの客間は昔のパリの客間にそっくりであった」（二十三）と述べている。したがって、薬種屋に来れば、東の間でも厳しい異境の生活を忘れ、故国の雰囲気浸るることができるからこそ、オークレール親子の家がフランス生まれの移住民たちには憧憬の対象となるのである。薬種屋に対する移住民たちの憧憬とは、換言すれば、オークレール家が〈物〉の面で一般の移住者よりも格段に恵まれていることを明確に示す証左である。では次に、〈心〉の観点から薬種屋で営まれている父と娘の家庭生活について見てみよう。

フランス家具はケベックの住民たちが故国を偲ぶために必要不可欠な物であろうと、その家具類を用いて故国とそっくりの生活空間を再生したのはオークレール夫人である。そして彼女が二年前に物故して以来、オークレール家の家政を切り回しているのはセシルである。だとすると、オークレール家の特質と魅力の創造者は二人の女性、今は亡きオークレール夫人と娘のセシルとなる。語り手は「オークレール家は、木や布やガラスや僅かな銀器でできているように見えるけれども、この家の個性なり特質なりは実に二人の女性の優れた徳性、つまり伝統に対する母の一貫した誠実さと、その母の意志に従う娘の忠実さで造られている」（二十五―二十六）と述べている。換言すれば、作者はオークレール家の家庭生活が祖国フランスの伝統に貫かれているからこそ、その忠実な継承者である二人の女性に惜しめない賛辞を呈しているのである。では、その伝統とは一体どのようなものであろうか。それは「はるか数百年の昔から連綿としてオークレール夫人まで受け継がれ、彼女が忘却の荒れ野や怒濤逆巻く大海原を越えて持参してきた生活についての感情」（二十五）、つまり何よりも秩序と規則正しさを重んじる「私たち独自の家風」（二十五）である。このフランス人「独自の家風」を娘に伝えるために、余命の少ないオークレール夫人がセシルに言い続けたのは次の言葉である。

「近い将来、私の病気が進んで、お前の手伝いができなくなると、お前が一人で一切のことをやるのは、ずいぶん辛いことだと幾たびも思うかもしれない。でも、やがては私のように自分の務めが好きになるものです。お父さまを幸せにするには、秩序と規則正しいことがいちばん大切だと分かれば、やがてはそうすることに誇りを覚えるようになるでしょう。生活に秩序がなければ、私たちの生活は哀れな野蛮人のように実に嫌なものになってしまいますからね。故郷のフランスでは、家事を最良の方法で切り回すようにと教わってきたものです。それに、私たちは良心的な国民です。だから、私たちはヨーロッパでいちばん文化的な国民と言われ、他の国々の人たちが私たちのことを羨むのですよ。」（二十四―二十五）

最初に、オークレール夫人が娘に教えた家政文化は、故国の一般的実像と言うよりはむしろ理想像である。というのも、海外の辺境植民地に住む移住者が母国の文化を高く評価すればするほど、その文化の特質と美点が拡大、強調され、理想像へと昇華されてゆくのは自然なことであるからである。次に、生前のオークレール夫人は母国の伝統文化を礼賛するところの良妻賢母であり、彼女の亡きあと、オークレール家の家事を一人で切り回しているセシルは、その母親が「とても聞き分けの良い子」（二十五）と感心した孝行娘である。したがって、オークレール夫人が不治の病に冒

され、余命の少なさを自覚すればするほど、フランスの伝統文化の理想像が確実にセシルに受け継がれてゆくのは自明の理である。というのも、「夫人は、自分の死後、今の生活、今の秩序が継承されてゆくように一心に幼い娘をしつけた」(二十三)からである。夫人がこの世を去っても、薬種屋が以前と変わらず町の人々の心を捉え、絶えず彼らを引き寄せるのは、この家では彼らの望郷心を慰め、満足させる母国の文化的な家庭生活が一貫して営まれ、<心>の面でケベックの移住民が理想と仰ぐ美しいフランスの伝統で貫かれていることの証である。では第三に、オークレール家の一人娘セシルと聖母マリアとの関連について見てみよう。

セシルが母に死なれたのは十歳のとき。当世風に言えば、小学四年生である。したがって、彼女が母から家政の在り方を教えられ、「とても聞き分けの良い子」と褒められたのは、それ以下の年齢である。しかも、彼女は母親の死後すぐに学校をやめ、以来^{オモムネ}鰥男の父のために一人でオークレール家の家事を切り回す毎日である。と見てくれば、「この世にセシルほど従順で忠実で善良な子供など居たためしがないのは確かであり、この少女の性格描写を歴史的観点から判断するなら、盲従あるのみで批判なし、と非難せざるを得ない [Surely no child was ever so obedient, loyal, and good as Cecile, and if we judge her characterization from a historical standpoint, we must condemn it as completely uncritical]] (ロソウスキー 一八四)と指摘されるのも尤もなことである。だとすると、その理由は何であろうか。それは『岩の上の影』が究極的には親孝行に最大の力点を置く母性賛美の物語であり、作者の思いを体現して心の優しい孝行娘を演じる主役のセシルに、あまりにも大きな象徴的意味が付与されているからである。では、セシルは一体いかなる人物として設定されているのであろうか。その答えは、既に指摘したように、岩山の「上の世界」と「下の世界」を取り次ぐ「仲介者」(竹下 一一六と一三三参照)、つまり新生カナダに於ける地上の聖母である。『岩の上の影』で作者は、後世カナダの聖母として神格視される一人のフランス娘についての聖者伝を書いたのだ [……in *Shadows on the Rock* she wrote a saint's life to tell of the apotheosis of a French girl into a Canadian Holy Mother]] (一八四)と、ロソウスキーは指摘している。具体的に見てみよう。

本作品には今一人重要な子供が登場する。セシルを慕う幼い男の子、ジャックである。彼は、船員や猟師を相手にいかかわしい安宿を経営する「下町」の性悪女トワネット・ゴアの息子で年は六歳、母子家庭の一人子である。彼には友だちはおろか、まともに「保護する者も世話する者もない」(四十九)。この愛情に恵まれない子供をセシルが家に連れてきて、母性愛のこもった面倒を見出したのは二年前のことである。オークレールは、最初「幼い娘が長い間母親の看護を手伝った後に、友だちのいない子供を選んで、その面倒を見たがるのも尤もなことだ」(五十二)と内心では肯定しながらも、世間的体面に捉われ、ジャックが素性の悪いところを出してもしたら、すぐに二人の仲を引き裂こうと心に決めていたが、今ではこの子に心から愛情を感じている。というのも、観察すればするほど、ジャックは「あんな女にどうしてあんな清らかな女が生まれたのであろうか」(五十三)と感心させるほど「実に行儀の良い子供」(五十一)であり、セシルの言い付けと教えをよく守る素直で、しかも信仰心のある子供であるからである。彼もまたセシルと同様、象徴的意味を付与された子供なのである。ジャックがセシルを慕い、彼女の教えに素直に従う理由の一つは、セシルと彼の母トワネット・ゴアが正反対の女性、換言すれば、セシルが本質的に母性豊かな女性であるからである。「セシル=カナダの地上の聖母」という表象像が明瞭に浮き彫りにされるのは、このジャックとの関連に於いてである。

最初に、厳しい北国の冬を目前に控えながら、素足にボロボロの破れ靴を履いている哀れなジャックの窮状を見るに見かねて、セシルがフロンテナック伯爵に取り次いだ結果、ジャックは高価な新調の靴とセシルに編んでもらった靴下を手に入れることができるが、この母性的な隣人愛(アガペー)

は、セシルが「上の世界」と「下の世界」を取り次ぐ仲介者であることを暗示する一つの証左である。次に、ジャック、つまりセシルの無私な母性愛の対象である幼い男の子が、幼児キリストと同一視されるとき、「セシル＝カナダの地上の聖母」という作者の意図は決定的なものとなる。キャザーは、第二巻「セシルとジャック」の第三章で「それは今から二年前のことである」（七十）というフラッシュ・バックの技法を用いて、幼いジャックと老司教のラヴァルとの間に起こったある不思議な出来事を本文に挿入している。

時は、町全体が一面の雪に覆われ、一月の月光が冴え渡る、ある寒さの厳しい真夜中：所は、老司教の長年の宿敵であるサン・ヴァリエ新司教の豪華な司教館の前の階段：登場人物は、着る物も着ずに、その階段の奥にうずくまって啜り泣いている「赤子のような男の子」と、召し使いを連れて通りかかったラヴァル老司教である。男の子とは四歳のジャックで、彼は、泊まり客の男たちと遊びに出たまま真夜中になっても帰宅しない母親を捜して途方に暮れていたのである。老司教はジャックを自宅に連れ帰り、自分のベッドに寝かせて、徹夜で介抱する。今もジャックの記憶にあるのは、老司教が暖かいタオルで彼の足を拭き終わると、身を屈めて彼の足を手に取り、最初は片方の足に、次いでもう一方の足に接吻したことである。この行為は、疑いもなく、老司教が幼子のジャックを幼児キリストと同一視していることの証左である。それというのも、老司教は「幼児救世主を思わせる、この幼子」（七十五）との邂逅を単なる偶然事ではなく、聖職者としての自己に内省と再生を迫る神の摂理と捉えているからである。老司教の回想によれば、彼の生涯は三十六年という等分な時期に二分され、前半生は純粋な求道者であったのに対して、後半生ではカナダに於ける教会の覇権を打ち立てるために、総督や知事などと世俗の争いに明け暮れる闘争の人であった。想い見れば、老司教は、カナダ移住を契機として「自分の精神と意志を霊の導きに服従させる」「瞑想と祈祷」（七十五）の人から「他の人々の精神や意志を自分自身の意志に服従させる」「行動の人」（七十五）へと変身していたのである。ケベックの宗教界に君臨するのは、開拓者世代に属するラヴァル老司教（七十三歳、辺境の偉人）とその後継者で彼に敵愾心を抱くサン・ヴァリエ新司教（四十四歳、前者とは対照的な俗物）の二人であるが、人間的評価に於いて両者の間に雲泥の差が設けられているのは、二人の年齢差に作者の世界観や人間観が如実に反映されている⁵⁾からである。既に見たように、フランスがケベックの開拓に着手したのは十七世紀の初頭（岩山の町ケベックの建設は一六〇八年）であるが、本作品の物語が始まるのは十七世紀の末期（一六九七年）である。

（五）

ラヴァル老司教が四歳のジャックにキリストの姿を見たのは今一つ理由がある。それは、彼自身が常日頃信徒に教えてきたように「この国ほど聖家族を一心に信仰している所は世界の何処にもない」（一〇一）からである。本作品に於ける「聖母マリア」、「嬰兒キリスト」、「幼子キリスト」という言葉の多用は、その事実を裏付ける証左である。というのも、「聖家族」の中ではキリストは大人ではなく、聖母に守護された幼い男の子であるからである。新生カナダのニューフランスが世界でいちばん「聖家族」を信仰する国であるとするなら、ケベックをしてケベックたらしめている一大要因は「聖家族」の信仰にある、と言えよう。では、その観点から見れば、ケベックとは一体いかなる土地なのであろうか。

最初に、「聖家族図」は「天上の三位一体図に対し、地上の三位一体図」（桑田 六〇七）と呼ばれ、配される人物は「聖母子＋ヨセフ」か「聖母子＋アンナ」である。つまり配置人物の脇役に多少の違いはあろうと、主役はいつも幼児キリストと聖母マリアの二人である。したがって、「聖家族図」が意味するところは、信仰に貫かれた家族の絆、とりわけ、聖母を要とする母子の絆の重視

にある。次に、カトリシズムの世界では、聖母は「キリストの母」であると同時に「すべての人間の母」(坂本 六十九)であり、聖母の役割は「子=人間」の祈りに応えて「キリストの恵みを取りつぐ」(坂本 六十九)ことにある。聖母がキリストと人間の間立つ恵み深い仲介者として特別視されるのは、このためである。「子=人間」は、惜しみない慈愛に満ちた「母=聖母」に誠の助けを求めることによって、「時の重荷」に支配された苦界から救われるのである。ストークは『岩の上の影』を作者の「煉獄」(一六一)と捉えている。と見てくれば、ケベックの住民たちが——いやしくもカトリックの信徒である限り——信仰生活に於いて聖母を最重要視するのは極めて自然である。具体的に見てみよう。

ケベックの人々が生きる日常世界は、総督と司教という政・教界の二大指導者を頂点とするヒエラルキー社会であり、それは外面的・形式的には紛れもなく父権制である。とはいえ、信仰の観点から見れば、この辺境植民地で何よりも重視されるのは聖母を要とする<母子の絆>である。したがって、ケベックの社会は外面的形式とは裏腹に内面的には母権制であり、その中でいちばん重要視されるのは聖母である。最初に、総督と聖母の関係について見てみよう。フロンテナック伯爵は十五歳で軍籍に入り、以来祖国のために数々の勲功を立てた偉大な軍人であるとともに、常に仰ぎ見られてきた「偉人」の一人である。「彼は政治と軍事に関する問題では頑固に教会の権威を認めなかった」(二四七)という言葉から窺われるように、伯爵はカナダ総督としては厳父であるにしても、「宗教上の問題では常に教会の権威を認め(る)」(二四七)敬虔なカトリック信徒である。六年前、彼がケベックを包囲したイギリス艦隊を撃破したとき、聖母が危急存亡時のケベックを救い給うた感謝の印として、「下町」にある唯一の教会、「嬰兒キリスト教会」を「勝利の聖母教会」(六十三-六十四)と改名したのは、この厳父が熱烈な聖母の賛美・崇敬者であることを示す何よりの証左である。では次に、今一人の偉大な指導者ラヴァル老司教と聖母の関係について見てみよう。

朝の四時に起きて、教会の鐘を打ち鳴らすのがラヴァル老司教の日課である。この鐘の音を聞いて不本意ながらも多くの人々が早朝ミサに出かける理由の一つは、「彼の意志が彼らの意志よりも強い」(七十四)からである。語り手は「規則正しい鐘の音とそれを鳴らす厳格な老司教は、人々に一日の活動を正しく開始させ、風が打ちつけようと大吹雪が吹きまわろうと岩山の全ての生活を一手に握りしめているようである」(一〇五)と述べている。「力強くケベックを守る」(一〇五)教会の厳父。それがラヴァル老司教である。彼が徹夜で面倒を見た幼子のジャックを召し使いに抱かせ、母親失格の性悪女トワネット・ゴーを叱責するために下町の「蛙屋」を訪ねたとき、さすがの彼女も怒れる老司教の前では「舌が濁く」(七十六)ほどの畏れを抱く。語り手は「彼女は老司教の威厳を、つまり祖先から受け継いだ貴い家柄と背後の権力、教会の力と個人の力をひしひしと感じた」(七十六)と述べている。この畏怖の念こそラヴァル老司教がいかに厳しい<教会の父>であるかを示す一つの証左である。とはいえ、この厳父ですらも聖母の崇敬に貫かれた人間である。それは、ジャックの将来の身の上を案じるセシルに対して、老司教が語る言葉を見れば自ずと明らかである。

- (1) 「セシルや、あの子のためにお祈りをしなきゃいけないよ。聖母マリアさまが最も身近でお守りくださるのは、あのような子供なんだ。いつも忘れずにあの子のことを聖母さまにお願いしなきゃいけないよ。私もきっとそうしてあげるからね」(二三一)
- (2) 「この私やお前よりも、聖母マリアさまがいちばん力をお持ちなのじゃ。娘や [My daughter]、聖母さまのお情けにすぎよう、お祈りすることを忘れてはなりませんぞ」(二三二)

二三三)

総督と老司教という<二大嚴父>がこれほどまで深く聖母マリアに帰依しているのは、ケベックの人間社会が信仰面では「キリストの母」にして「すべての人間の母」である聖母を頂点とする母権制であることを明確に示すものである。この母権制社会を貫く聖母崇敬とは、換言すれば、「天上の聖母」対「地上の人間」という縦軸のアガペーを意味するものである。では、「聖家族」の信仰者は聖母を賛美、崇敬するだけでよいのであろうか。その答えは「聖家族」の教えにある。というのも、「聖家族」は聖母の重要性と同時に、家族の絆というものの大切さを教えているからである。つまり「聖家族」の信仰者は「天上の聖母」を賛美、崇敬するのみならず、<地上の家族の絆>を大切にしなければいけないのである。カトリシズムの世界が「ファーザー」、「マザー」、「ブラザー」、「シスター」、「子＝一般信徒」から成る多層的な大家族制の共同体であり、隣人とは信仰を通して繋がる兄弟姉妹にして家族制共同体の一員であることを考えるなら、ここで言う家族の意味が肉親のみに止まらないことは自明である。

語り手はセント・ローレンス川から仰ぎ見るケベックの町の姿を「岩山全体が凍りついた川上にそそり立つ一つの大きな白い教会堂」（一三六）とか「沢山の蠟燭が立っている祭壇か、古い伝説にある聖なる都」（一六九）に譬えているが、ケベックの一大特質である「聖家族」の信仰とは、この新生カナダの地が<聖母対人間>という縦軸のアガペーと<人間対人間>という横軸のアガペーから成る<恵みと救いの土地>であることを意味するものである。そのことを端的に立証するのはマリーという罪深い女の救済物語であり、慈善病院の現修道院長マザー・ジュシローが初代の院長、故マザー・カトリーヌに纏わる話としてセシルに物語る形式を取っている。父親に同伴して慈善病院を訪れたセシルの願いに応じて、マザーは彼女に語る。カナダに一身を捧げたフランス人聖女、カトリーヌが未だ修道女の頃のことである。慈善病院の一角で祈りを捧げる彼女の前に立ち現れて、救いを求めたのは母国で惨めな死に方をした名うての悪女マリーである。マリーは如何なる人の忠告にも全く耳を貸さず、罪深い放埒な生活を長く続けた結果、町から追放され、最終的には洞窟の中でサクラメントも受けずに死ぬ。そして、その遺骸は、不潔な獣のように溝に投げ込まれて埋められる。この地獄に落ちたと信じられていた罪深い悪女の霊が、はるかケベックに現れ、同郷人の修道女カトリーヌに訴えたのは、次のことである。

「自分が洞窟で死にかけていることを自覚し、心身ともに汚れて、世間から見捨てられたことを知ったとき、私は自分が犯した全ての罪の重荷というものを感じました。私は聖母マリアに向かって叫びました。天上の母よ、貴女さまは、身を滅ぼし見捨てられた者が最後におすがりする方です。私は世界の一切に見放されました。貴女さまの他に希望はありません。ただ貴女さまだけが、私の落ちた所へ下りてこられるお力をお持ちです。どうぞキリストの母マリアさま、私にお慈悲をおかけください！ 優しい万民の母は、今わの際に私を悔悟させたのです。私は死んで救われたのです。聖母さまは私の刑罰を縮めるお恵みをたれたので、今は二、三度のミサが私を煉獄から救うのに必要なのです。なにとぞ私のためにミサを唱えてください。そうして頂ければ、神さまと聖処女マリアさまに貴女のことを祈り続けます。」（三十八―三十九）

マリーの願いに応じて、カトリーヌ修道女が一心にミサを唱えた結果、数日後に感謝と喜びに満ちたマリーの霊が聖女の前に現れ、煉獄から救われたこと、今度は彼女が聖女のために祈りを捧げることを告げる。マリーが罪を犯したのはフランスである。しかし、その罪が贖われ、彼女が煉獄から救われたのは、ケベックに於けるアガペーの結果である。これは、ケベックが恵みと救いの土

地であることを象徴的かつ明確に示す一つの証左である。「私は聖処女マリアさまの限りないお慈悲のお陰で救われたのです」(三十八)というマリーの言葉に端的に示されているように、キャザー文学に於ける<救い>の問題は聖母を抜きにしては考えられないものである。というのも、<母性賛美>と<性愛忌避>を色濃く内に秘めた女性作家のキャザーが非情な「時の重荷」の果てに<罪の意識>と<死の恐怖>に苛まれるとき、救いを求める彼女の意識が最終的に収斂してゆくのは、<救世主の聖母にして全ての人間の母、聖処女マリア>であるからである。キャザーの人と作品について考えるとき、忘れてはならない重要な点は、壮大な「アメリカの夢」を実現するために、旧西部ネブラスカの田舎娘である彼女が払った最大の犠牲、それは<女>であることを抑圧し、生涯独身を貫くことであった、ということである。では、ケベックが恵みと救いの土地であることを示す第二の事例について見てみよう。

それは、フランスで無念の死を遂げた哀れな死者を悼んで、命日には必ずケベックの修道院でミサを捧げる生者の物語であり、オークレールが娘のセシルに語る形式を取っている。哀れな死者というのは、オークレールが未だ子供であった頃に、両親が面倒を見ていた身寄りのない貧しい研ぎ師で、悪徳裁判官に濡れ衣を着せられて刑死したビシエット老人のことである。その日暮らしの貧しい生活に追われながらも、この老人は信仰心のある、心がけの良い人物であった。彼がネコヤズメを捕まえては残虐行為を繰り返す「不良少年」(九十二)の犯行現場を目撃したとき、この少年を厳しくたしなめて彼の手から動物を解放させたこと、また「ビシエット爺さんは、自分より下の人には親切で優しい人であった。下の人というのは、爺さんよりもまだ貧しい人が居たからね」(九十一)というオークレールの言葉は、何よりも、ビシエット老人が弱者ゆえに弱者の悲哀を知り心優しい善人であることを示すものである。

とはいえ、この好々爺も生活の貧しさには勝てず、長い間空き家の馬小屋に放置されていた古物の湯沸かしを持ち去って、金物屋に売るといふ微罪を犯す。こんな微罪が発覚したのは、復讐の機会を狙っていた例の不良少年がお上に密告したためである。そして微罪であるにもかかわらず、ビシエット老人が極刑に処されたのは、彼が無名の庶民であり、お上が腐敗と墮落を極めていたからである。ルイ十四世下の悪政と重税のもとで社会の底辺に生きる人々が塗炭の苦しみをなめていたことは、上に引用した「ビシエット爺さんよりもまだ貧しい人が居た」というオークレールの言葉を見ても明らかであるが、フランスの国情は年々ひどくなる一方である。

オークレールの時代になると、課税はますます破壊的になり、窮乏と飢餓は増すばかりであった……その間にも宮廷の取り留めない奢侈はいつそう法外なものになっていった。国民の富、フランス国土の畑や葡萄園や森林の富はベルサイユの歡樂造営に取られてしまった。この国の富裕な貴族でさえ華麗な礼服や宝石類で破産しかけていた。それに新しい悪弊が起りこぞすれ、旧弊はいつこうに減らなかった。人々の貧乏が増し、絶望的になるにしたがい、拷問や残酷な刑罰が増した。(三十二)

<民は生かさず殺さず>という悪政のもとで「たとえ真鍮の湯沸かし二つであろうと、古物の鞍であろうと、貧乏人の命よりは価値がある」(九十三)という途方もない悪法が罷り通っていたのである。ビシエット老人が処刑されたあと、オークレールの母親が持病の喘息の発作に襲われても一切の治療を拒むのは、生きる気力をなくしたからである。「あんな惨いことが許される世の中には、もう何の未練もない」(九十三)と息子に嘆息する彼女の言葉と「私もお祖母さんと同じ気持ちよ……そんな所に住みたくないわ! ずっとこのままケベックに居た方がまだわ」(九十三)というセシルの言葉は、フランスとケベックとの対照的な違いを示す今一つの証左である。旧大陸

のフランスが＜闇の国＞であるとするなら、新大陸のケベックは紛れもなく＜光の国＞である。というのも、第一に、本作品の主人公を務める父子の姓「オークレール」とは語源的には「光」に関係している⁶⁾からであり、第二に、この親子が＜光の国＞を代表する人物であるからこそ、次のように語るのである。

「私は、あの人の良い爺さんが昔から天国に居ると信じている。毎年私がミサを唱えるのは、あの人が満足するから、というより私の気持ちが済むからなのだよ。それに、私の一家が、まだ忘れてはいないということを爺さんに知らせてやりたいのだ。」

「お父さん、私も生きている限り、命日にはビシェット爺さんのためにミサを唱えます。」

（九十三）

ビシェット老人が、まるで虫けらのように殺されたのはフランスである。しかし、この無名の死者に対して毎年敬虔なミサが捧げられているのはケベックである。くわえて、この植民地の宗教行事の中で、とりわけ重要視されるのは死者のために祈る日、「移住者たちの思いが遠く離れた故国の教会や墓地に帰（る）」（九十六）「諸魂日（十二月二日）」⁷⁾である。つまり、ケベックは生者と生者のみならず生者と死者をも繋ぐアガペーの土地であり、そこで住民たちの鏡となる模範的な家庭生活を営んでいるのがオークレール家である。ビシェット老人はフランスで無念の死を遂げ、母国の人々からは忘れ去られても、ケベックで営まれる敬虔な宗教行事を通してオークレール一家の心の中で＜再生＞し続けるのである。では、ケベックが恵みと救いの土地であることを示す第三の事例について、第三巻の「長い冬」から見てみよう。

セシルが母親から引き継いで面倒を見ている男に、プリンカーという^{あだな}渾名を持つ、ひどい斜視の醜男がいる。その面倒というのは、ひもじい生活をしている彼に、毎晩暖かいスープと一杯の葡萄酒を与えることである。プリンカーは町の「物笑いの種」（十六）になるほど、森とインディアンを恐れる気弱な男である。だが、この男には、死刑執行人（拷問吏）として無実の女を処刑したという、人には言えない暗い過去がある。自分の性格と意志に反して、プリンカーがその職に就いたのは、彼が死刑執行人の息子という不幸な星の下に生まれたからである。無実の人間をあやめるといふ衝撃的な事件の後で、亡霊と罪悪感に心身を苛まれたプリンカーが密かに母国を捨て、ケベックに流れてきたのは四年前のことである。しかし遠い異土に逃れ、徹底的に過去を隠してみても、記憶の世界からは自由になれない以上、いつまでも荒地的な心象風景と罪の意識に苦しめられるのは自明の理である。それは『私のアントニア』に登場する二人のロシア移民、パーベルとピーターの事例⁸⁾を見ても明らかである。キャザー文学に於いて罪人を救うのは聖母であり、その聖母に譬えられているのがヒロインのセシルである。と見てくれば、プリンカーがセシルとの係わりを通して、心の安らぎと救いを得るのも何ら不思議なことではなからう。

かたくなに心を閉ざして生きるプリンカーが、初めて人間らしい感情を表出したのはセシルの前である。「苦しみは、人を思いやる気持ちを教えてくれる」（一六二）というオークレールの言葉が真実だとするなら、プリンカーこそ人の情けには人一倍敏感な人間のはずである。聖誕祭の人形を飾る日、誰からも相手にされない陰気で孤独な彼を自宅の客間に招き入れ、聖誕祭の準備に参加させたのはセシルである。プリンカーが箱から人形を取り出すたびに、今まで人には見せたことのない打ち解けた喜びの声を上げたのは、彼にはこのような体験は初めてであるからである。「北風と太陽」の教訓が示すように、プリンカーは＜聖母セシル＞の＜子＞として温かく彼女に迎え入れられ、キリストの降誕という「聖家族」の世界に導かれるとき、自己の堅い殻を脱ぎ捨て、無邪気な子供の世界に立ち戻ることができるのである。プリンカーがキリスト降誕に纏わるセシルの話の間

いて、密かに涙を流しながらオークレール家の客間から退出するのは、彼が罪と救いに捉われた人間であることを示すものである。セシルが真実<地上の聖母>であるとするなら、罪人のプリンカーが救われる日もそう遠くはなからう。作者が上記のエピソードをクリスマス・イヴの日に設定し、救世主の降誕と結びつけているのは意味のないことではあるまい。

事実、プリンカーが重い口を開いて積年の心の重荷を降ろしたのは、これから僅か数か月後のことである。しかもその舞台は、またしてもオークレール父子の家である。彼がオークレールに自分の暗い過去を打ち明けたのは、ビシェット老人に纏わる葉種屋親子の会話を偶然立ち聞きし、この父と娘が実に心の優しい人間であることを確信したからである。別室から微かに洩れてくる対話の内容は分からずとも、プリンカーのたいそう哀しそうな声を耳にして、寝るに寝れず寝室で独り泣いていたのはセシルである。睡眠薬を与えてプリンカーを帰したあと、父が娘に語る言葉：「私たちは、あの人に心を尽くして親切にしてあげなければいけないよ。お前のお母さんは、あの人は悪い人じゃないと言っていたが、全くその通りだ。私は明日セバスチャン聴罪師の所に出かけて、二人で彼の苦しみを治してあげるつもりだ……憶えているかい……デイド女王がアイネイアスを歓待する時に言った言葉を。<自ら悲運を体験して初めて、不幸な人々に憐れみを抱くようになる>とね」(一六三)は、オークレール家の人々とは紛れもなく<光の家族>であることを示すものである。ここで作者は一つの意義深いエピソードを挿入している。それはプリンカーが長い間心に秘めてきた暗い過去を告白した翌朝、「春告げ鳥」のツバメがオークレール家に現れ、待ち焦がれていた春の前兆に親子が喜ぶというものである：「まあ、お父さん、うちのツバメだわ！ それじゃ、もう春になるのね！ ここまで来れば、春は近づく一方よ」(一六四)。北国の暗くて長い冬と同様、プリンカーの冬の時代もついに終わったのだ。

(六)

世界一「聖家族」を信仰する土地を舞台に、「聖家族」の教えに適う模範的な家庭生活を営む<光の家族=男鰥夫の平凡な父親と非凡な孝行娘>が織りなす<愛=アガペー>の物語。それが『岩の上の影』である。したがって、本作品の基底を成すのは聖母を要とする「聖家族」の信仰、換言すれば、愛と命の源である母性の賛美と家族の絆の重視である。作者がセシルを地上の聖母に譬え、彼女に最大の賛美と祝福を与えているのは、この孝行娘が「聖家族」の教え、つまり地上の家族の絆を大切にす、という横軸のアガペーに貫かれ、作者を苦悩、絶望させた「自己愛(エロスの本質)」⁹⁾の罪とは無縁の、無私な母性愛に溢れた女性であるからである。それを端的に示すのが、セシルの父母に対する孝養と隣人、とりわけジャックに対する愛である。最初に、彼女が母の死後十歳で学校を中退したのは、母の遺志を継いで、男鰥夫の父の面倒を見るためである。この一事を見ても、セシルがいかに家族の絆を大切にす人間であるかは明白である。次に、ジャックに対するセシルの「家族愛=隣人愛」は、彼女が「聖家族」の教えを誰よりも素直に実践していることの証左である。セシルが子供ながらに真の信仰心に貫かれているからこそ、彼女の母性愛は自分の家族のみならず信仰で繋がる家族の一員、哀れな隣人のジャックにまで及ぶのである。それというのも、セシルが「とても聞き分けの良い子」であり、彼女をしつけた母親がカトリック教徒の鏡でもあったからである。ラヴァル老司教は、セシルに「お前のお母さんは、お手本とも言うべき信仰の厚い人であった」(二三〇)と告げている。

とはいえ、「この子に(修道女として生きよ、という)神のお召しがないことは確かである」(三十九)というマザー・ジュシローの確信に満ちた言葉に示されるように、セシルの生きる世界は修道院ではなく、世俗の世界である。つまり、彼女はあくまでも家庭生活を核に母性の特質を発揮す

る女性なのである。その家庭生活で要となるのが<信仰と家族の絆>である。ここで言う家族の絆の中で、女の子は父親と、男の子は母なる女性と格別に強く結びつくのがキャザー文学の特質の一つであることを忘れないでおきたい。それは『私のアントニーア』や『我らの一人』を見れば直ぐに分かることである。それらの点を踏まえた上で、セシルよりも凡そ一世代年上の人物で、第三巻の「長い冬」に登場する、姿を見せない隠れ修道女、ジャンヌ・ル・ベルについて見てみたい。彼女は自己の大願成就のために、家族と一切の縁を切って世捨て人になった女性であり、親孝行という点から見れば、セシルとは正反対の人物である。その意味で、作者がセシルの回想を通してジャンヌを紹介する形式を取っているのは意味深長と言える。具体的に見てみよう。

ジャンヌはモントリオール一の富裕な商人の一人娘として生まれ、何不自由のない身の上でありながら、十五歳の時に「世の光」（一三一）になりたいという大願を抱き、両親や位の高い聖職者の強い反対と説得にも屈せず、十七歳で<出家>し、爾来約二十年、裁縫仕事を通して教会と貧者に奉仕しながら「隠者生活の絶対的孤独」（一三二）を貫き、ついに自己の大願成就に成功した非凡な女性である。一月のある晩、<ジャンヌが籠もる礼拝堂の庵室に公現祭（一月六日）の翌日天使が現れ、彼女の壊れた糸車を修理した>という噂がケベックの町に伝わる。最初に、語り手は「そのひどい冬の間、ジャンヌ・ル・ベルの糸車の話は、多くの家々の炉端で愛すべき尾ひれをつけて繰り返し語られた。天使が彼女のもとを訪れたという話は、雪に覆われたカナダを越えて遠方の教区にまで広まり、その先々で人々に喜びをもたらした」（一三六）と述べている。次に、聖女としてのジャンヌの評価は「ヴィル・マリー（ジャンヌの故郷の町）の罪人は全て、あの献身的な乙女の祈りのお陰で救われたことであろう」（一七五）というラヴァル老司教の言葉に明らかである。だとすると、この有り難い聖女に纏わる奇跡の物語が年とともに伝説として定着し、新生カナダの地で「光」を求めて生きる人々に「喜び」（一三六）を与え続けてゆくのは確かである。事実、「ジャンヌ・ル・ベルの糸車の話」をたいそう興奮してセシルに伝え、フランスよりもカナダの方が神の国に近いと述懐するのは、いまだ暗闇の世界に生きるプリンカーである（ちなみに彼が薬種屋で積年の心の重荷を降ろすことになるのは、この数か月後の春である）。ジャンヌが「ヴィル・マリーの世捨て人」（一三四）として今も多くの人々から慕われ、歴史にその名を残している¹⁰⁾のは、彼女が時空を超えた「世の光」であることの証左と言えよう。

とはいえ、ジャンヌ自身の人生はどうであったのだろうか。彼女は最終的に自己の「成功」に満足できたのであろうか。苦節二十年、青春時代の夢を実現させたことは何よりもジャンヌの「強さ」を示すものであり、「願望は創造である」（『教授の家』二十九）という作者の信条に繋がるものである。しかし、ジャンヌがいかに非凡な女性であろうと、神ではなく人の子である以上、強ければ強いほど、その人生が「強さ」の反面「哀れ」を伴うことは『おお、開拓者たちよ！』のヒロイン、アレグザンドラ・ベルグソンを見ても明らかである¹¹⁾。ジャンヌの人生について考えるとき、重要なことは「聖家族」の信仰が世界でいちばん盛んな国で、彼女が家族の絆に徹底的に背を向け、世捨て人として生きた、いや自己の大願を成就するためには、そう生きざるを得なかったということである。ここに彼女の払った犠牲があり、彼女の「哀れ」に繋がる要因がある。

まず第一に、世捨て人としてのジャンヌの出発点に悲劇的な親子の断絶がある。彼女が尼僧になる決心をしたのは、ケベックでの三年間の遊学生活を終えて帰郷した十五歳の時である。にもかかわらず、取りあえず五年間の貞潔の誓願を立て、屋敷内の自室に閉じ籠もることができたのは十七歳の時である。決意と実施の間に二年の時間差があるのは、一人娘の結婚を夢見ていた「父親の絶望に勝てなかった」（一三二）からであり、その説得に時間がかかったからである。十七世紀のカナダでは、女性の結婚適齢期は遅くとも十五歳（十六歳を過ぎると親に罰金が科せられた）¹²⁾であったことを指摘しておきたい。一人娘のジャンヌに対して父親が格別の愛情を抱いていたことは、彼

が発表した「娘の持参金は五万エキュー」という言葉に明らかである。というのも、この持参金の故に、ジャンヌは「カナダ—富裕な女相続人」(一三三)と呼ばれたからである。それだけに愛娘に夢と期待を裏切られた父親の落胆と悲しみは、筆舌に尽くしがたいほど深いものであったに違いない。最終的に父親の絶望に打ち勝ち、己の意志を貫き通したところに、ジャンヌの「強さ」がある。世捨て人として生きるために、ジャンヌが最初に捨てざるを得なかった者、それは彼女を愛し、慈しみ、その幸せを願い続けた両親である。「引き籠もるとき、ジャンヌは家族の者に、誓いを立てた五年の間は、どんなことがあろうと彼らと話をしたり、交わったりしてはならないのだと説明した」(一三二)という語り手の言葉を見れば、世捨て人の定めとは身内の家族にとっていかに非情なものであるかは言うまでもなからう。聖書に「わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子、あるいは畑を捨てた者はすべて、その幾倍もを受け、また永遠のいのちを受け継ぎます」¹³⁾というイエスの言葉があるにしても、生涯世捨て人を貫き通したジャンヌの生き方が本作品で強調している「聖家族」の教えに適っていないことだけは確かである。

第二に、一途にジャンヌを愛しながらも、彼女の「強さ」ゆえに絶望的な人生の苦杯をなめた男性が今一人いる。毛皮商売を営むジャンヌの父親のもとで有能な番頭を勤めていた隣家の若者、彼女と同年で幼馴染みのピエール・シャロンである。彼がジャンヌの結婚相手として最も相応しい人物であることは自他ともに許していたことであり、またそれだけの値打ちのある非凡な男性である。父の死後ピエールが隣家に雇われ、毛皮商売のやり方を仕込まれたのは、彼の父もジャンヌの父親と同様、毛皮の商売で成功していたからである。ピエールはセシル一家とも古い顔馴染みであるが、オークレールはこの青年の第一印象について次のように述懐している。

オークレールにとっても、また彼の妻にとっても、ピエール・シャロンはやっと探し当てた模範的人物のように思われた。他の誰にもましてピエールは、彼らが祖国のセヌ川の岸辺で思い描いていたく大なる森の自由なフランス人>というロマンティックな心象を如実に体現していた。彼は旧世界の礼節と、新世界の気力と勇敢というものを兼備していた。(一七一—一七二)

ピエールの今一つの美点は、彼が何よりも家族の絆を大切にすることである。母親に対する彼の孝養ぶりは「敬意」(一七三)に徹したものである。とはいえ、ピエールは模範的な孝行息子であると同時に、カトリックの信徒でもある。したがって、彼の家族愛とは「隣人」を含めた広い家族愛のことであり、その中で核となるのが自己の家族の絆である、と言えよう。(ビシュットやプリンカーに纏わるアガペーの物語がオークレール家の揺るぎのない家族の絆の上に成り立っていることを忘れてはなるまい)。「彼にとって家族というものが、人間の絆の中で最初にして最後のものであることは至極明快であった。<たいへん結構なことだ。炉端には宗教があり、森には自由がある>と彼には言えるのも、それが宗教でしっかりと接ぎ木されていたからである」(一七四—一七五)という語り手の言葉は、それを裏付ける証左である。ジャンヌが<世捨て人>ではなく<女>として生きたならば、ピエールと結婚して「幸せな母親」(一七七)になっていたことは間違いなからう。というのも、ピエールは数多い求婚者の中でいちばん熱心で、しかもジャンヌの父親の眼鏡に最も適った人物であり、当のジャンヌ自身も彼には好感を抱いていたからである。語り手は「彼女はピエールに好意を抱いているようであった。ジャンヌが最初の誓願を立てて父親の家に籠もってからというもの、若いシャロンは失望のあまり森に入ったというのは、モンリオールでは今はもう古い話である」(一七二—一七三)と述べている。

想えば、ピエールが定期的ミサに出かけるジャンヌを待ち伏せして、彼女に面談を求めるといふ思い詰めた行動に出たのは、彼女が自宅に引き籠もってから四年目のことである。しかし、ジャ

ンヌはピエールを責めるところか、彼との再会を喜んで「私はいつも貴方のために祈っています。そして貴方に子供ができれば、その子供のために祈りましょう。私たちが二人ともこの世に生きている限り、私は毎日貴方のために、こう祈っているものと承知しておいてください。神さまが貴方を悔罪の暇もない急死からお救いくださいますよう、また私たちが天国でまた会うことができますように」（一七九）と優しく慰める。ここにピエールに対するジャンヌの特別な思いを感じとることができよう。ピエールが三十の半ばを過ぎても独り身であり、ジャンヌのことを思い切るのに二十年近い歳月を要するのは、少なくとも、彼の思いが一方的な片思いではなかったことを示すものである。「世の光になる」という悲願を成就させるためには、ジャンヌは自分の親のみならず相思相愛の幼馴染みですらも捨てなければならなかったのである。これが世捨て人の定めではあるとしても、果たしてジャンヌ自身は何時までも「強さ」の段階に踏み止まることができるのであろうか。一般にキャザーの描く偉人たちは時間を「創造の媒体」として、ひたすら願望の実現を目指して生きている間は「強さ」の段階にあるが、いざその願望の実現に成功すると、悲劇的な「成功のパラドックス」¹⁴⁾に襲われるのが常である。この「成功のパラドックス」の故に、彼らは「哀れ」へと陥るのである。狭義の<家族の絆>という点から見れば、ジャンヌは、ピエールを捨てることによって、彼女の未来の家族をも捨てた、と言えよう。長い孤独な苦行生活の果てにジャンヌが「時の重荷」を痛感する段になって、ピエールに対する心の痛みと同時に、チャールズ・ラムの描いた「幻の子供たち」¹⁵⁾を思い見たこともあったのではなかろうか。いな、そんな想像をするのは凡庸な俗人に過ぎない筆者の<弱さ>であらうか。

第三に、ジャンヌの「強さ」の裏側には、父親のみならず母親との絆ですらも断ち切らなければならなかった哀しみがある。ジャンヌの母親が亡くなったのは、彼女が二度目の誓願を立て、新たにもう五年間の隠遁生活を送っていた時のことである。母親は今わの際に家人を娘の戸口までやって、今生の別れをしたい旨伝えたにもかかわらず、返ってきたのは「日夜、母のためにお祈りしています、と伝えてください」（一三三）という言葉のみである。母親に孝養の限りを尽くすセシルやピエールに対して、臨終を目前にした母の願いも聞き入れず、その死に目にも会おうとしないジャンヌ。この親不孝な行為も信仰生活の中で癒され、決してトローマとは成り得ない、とは誰が言えよう。そもそもジャンヌが家族と縁を切ったのは<自己の願望を成就させるため>であり、彼女の孤独な苦行生活は、これ以後更に長く続くのである。また「あなたの父と母を敬え [Honour thy father and thy mother]」（「出エジプト記」20：12）とはモーセの十戒の中でも極めて重要な戒律の一つであり、当時の作者が半身不随と重い言語障害に苦しむ母親の看護に心身を擦り減らしていたことを忘れてはなるまい。ここで、自戒の意味を込めて、老いたる作者の深くも哀しい自省の言葉を敢えて紹介しておきたい。

（彼女たちも年を取れば）若い時には気づかなかったことに気がつくようになる……「私は若くて強くて、求めることに夢中であった。そのために、人に対して無情であった。今になって分かった」
（『ハリスお祖母さん』一九〇）

例の糸車の事件のあと、聖女としてのジャンヌの名声は高まる一方である。とはいえ、当のジャンヌ自身は本当に幸せなのであろうか。というのも、仕える神に違いはあれ、作者もまた自己の願望を成就するために<女>ではなく<（厳しい芸術の）神に仕える人間>として生きた女性であり、しかも文名が揚がるにつれて苦悩と絶望の度合いを深めていったからである。本作品に於けるジャンヌの苦行生活の最終点、換言すれば、彼女の「成功のパラドックス」を具体的に見てみよう。舞台設定は、時は六月一日のある晩：所は薬種屋の客間：登場人物は、重い口を開いてジャンヌの近

況を語るピエールとその話に耳を傾けるオークレール、というものである。ピエールは、数か月前の三月のある寒さの厳しい夜、ジャンヌのことを案ずるあまり、彼女の庵室がある礼拝堂に忍び込んで「二十年近くも死んでいる女」(一八一)の哀しい末路を盗み見る羽目になったのである。彼の報告によれば、<天使の訪れを受けた聖女>という輝かしい名声とは裏腹に、ジャンヌの内面世界は荒涼としたものである。

「石像のような顔だった。ありとあらゆる悲しみを経てきた顔だった……彼女の声は(私を狼狽させるほど)変わり果てていた——しゃがれて虚ろで絶望の色が込められていた。なぜ不幸なんだ? その訳を彼女に聞いてみたいよ。彼女が不幸なことは分かっていた! 黙祷している時だって、どんなに溜め息が洩れたことか。そして、一度は私も聞いたことのないような呻き声を。それほどひどい絶望——それほどひどい諦めと絶望だった! 身体の中がすっかり凍りついてしまった。自分が二度と元の人間には戻れないような気がした」 (一八三)

「私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行っているからです……私は、内なる人としては、神の律法を喜んでいるのに、私のからだの中には異なった律法があって、それが私の心の律法に対して戦いをいどみ、私を、からだの中にある罪の律法のとりこにしているのを見いだすのです。私は、ほんとうにみじめな人間です」(「ローマ人への手紙」 7:14-25)と慨嘆するのは聖人パウロである。したがって、ジャンヌの苦悩と絶望の真の原因はどこにあるのであろうか、と問われれば、筆者のような凡人には、それは救いがたい人間の弱さと罪の深さにある、としか言いようがない。

とはいえ、偉人ジャンヌを最終的に不幸な人間として描いたのは作者、つまり極めて自伝的要素の強い女性作家キャザーである。だとすると、何故にジャンヌは不幸なのか、という問いに答えるヒントは作品の中にあるはずである。筆者の考えでは、それは本作品で強調されているケベックの一大特質、つまり「聖家族」に対する熱烈な賛美と崇敬にある。というのも、「聖家族」が教えるものは、聖母崇敬に貫かれた<信仰と家族の絆>の大切さである;にもかかわらず、世捨て人のジャンヌには自己の願望に捉われた<信仰>はあっても、相互に係わり合う横軸の<家族の絆>が欠けているからである。作品の中でこのカトリック聖女と聖母の係わりが何一つ言及されていないのは、あながち意味のないことではあるまい。彼女は家族の絆を断ち切って、ただ独り庵室に籠もり続ける隠れ修道女であり、この孤独に徹した「世捨て人」の姿を「聖家族」のような家族絵図の中で思い浮かべることは未来永劫に不可能である。共に独身を貫く女性でありながら、ジャンヌとは対照的に、ウルスラ会女子修道院や慈善病院の修道女たちが「いつも快活」で「上機嫌」(九十七)であるのは、彼女たちが家族の絆というものを大切にしているからである。「彼女たちは大西洋を渡ってきた時には、家族も親類も親友も共に連れてきた。どんなに小さな木造船で苦しみながら海を渡ったにしても、彼女たちは彼らを一人残らず連れてきた。そして、カナダの地に聖者や殉教者や輝かしい使徒の群や多数の天使から成る聖家族を運んできた」(九十六-九十七)という語り手の言葉は、その証左である。

と見てくれば、市井に生きる庶民の父と娘を主人公とする本作品で究極的に賛美され、祝福されるのは「聖家族」の地上(世俗)版であり、ヒロインのセシルに相応しい未来の伴侶は、家族の絆を何よりも大切にするピエール(三十七、八歳)ということになる。セシルにとっても、また読者にとっても、これは全く意表をつく結論であろう。とはいえ、六巻から成る本文の一卷が「ピエール・シャロン」という表題であることを見ても、彼が重要人物であることは確かである。そのことを一応念頭に置いた上で、改めてセシルについて考えてみたい。というのも、フランス文化に貫か

れたオークレール家がいかに移住民たちの心を捉えようと、家政を預かるセシル自身がその継承文化の意義と価値を理解しないかぎり、いつまでも「とても聞き分けの良い子」のままであり、新生カナダの地上版「聖家族」の＜聖母＞になる資格は有り得ないからである。セシルが象徴的意味を付与された子供であり、信仰と家族の絆の双方を大切に生きて生きる少女であることを忘れてはなるまい。

(七)

六月最後の週のある日、セシルはピエールのカヌーに便乗して生まれて初めての旅に出る。旅の予定は三泊四日、行く先はオルレアン島である。彼女は前々からこの島に渡ってみたいと思っていたのだが、その願いをピエールが叶えてくれたのだ。彼の友人で、島で鍛冶屋を営むアルノワ一家を訪ねる用事ができたからである。アルノワ一家はセシルを温かく迎えてくれた上に、この家の子供は四人とも全て女の子である。島の野原や沼地には美しい野の花が咲き乱れ、まるで「楽園」（一八九）にいる気分である。にもかかわらず、就寝時を迎えたとき、その気分は一転する。というのも、アルノワ家では衣食住の全てに互って家政が出鱈目であることが分かったからである。たいへん蒸し暑い寝室に汚い寝具。しかも、一つのベッドに五人の子供が寝るのである。一睡もできずに、独りこっそりと忍び泣くセシルの脳裏に去来するのは、新たに知る母の偉大さである。「母は家の中のことを全て美しくしていたというのに、ここでは料理も、食事も、寝ることも、住むことも、なんだっけ胸がむかつくように思われる。海上のどんなに長い旅だって、こんなひどい状態に人を置くことなんて有り得ないだろう」（一九二）というセシルの思いは、その確かな証左である。

三日目耐えきれなくなったセシルは泣いてピエールに訴え、二人は予定よりも一日早くアルノワ家を去る。セシルの旅は完全に期待はずれに終わるが、彼女はこの旅の体験を通して初めて、精神的に＜子供＞から＜大人＞に成長する。その意味でオルレアン島への旅、アルノワ一家の訪問はセシルの人生に於けるカイロスと言える。これほど重要な人生の旅に同伴していたのはピエールであり、彼がセシルの人生開眼にも無関係ではないことを指摘しておきたい。というのも、自宅に帰着くやいなや、彼女はピエールに対するお礼とお詫びの印として彼を夕食に招待することにし、「ピエールのために美味しい夕食を作ってあげよう」（一九七）と張り切っていたとき、次のことを思うからである。

二日ぶりに自分の道具を使い始めたとき、万事が前とは少し違っているように思えた。まるで、自分が家を空けていた二晩の間に、少なくとも二歳は年を取ったようだ。自分は、もはや教えられた通りのことをする少女ではないような気がした。自分が家政の全てにたいそう気を配るのも、父を喜ばせ、母の遺志を実行するためだとばかり考えてきた。今になって、それは全く同じぐらい自分のためでもあることが分かった……ここにある大小の銅器、^{ほうき}箒、雑巾、ブラシは道具である。けれども、人はその道具でもって、靴や家具ではなく、人生そのものを作るのだ。風土の中にまた（精神的）風土を作るのだ。毎日毎日を作るのだ。過ぎゆく日々の色艶、特別の風味、特別の幸福を作るのだ。（一九七—一九八）

ここに、セシルの＜子供＞から＜大人＞への精神的成長、換言すれば、彼女のイニシエーションが描かれているのは言うまでもなからう。それは、「少なくとも二歳は年を取ったようだ」という言葉を見ても明らかである。というのも、彼女の実年齢、つまり「十三歳」（二一七）に「二歳」

を足せば十五歳（結婚適齢期）となるからである。セシルは六月生まれであることを指摘しておく。

とはいえ、「この子（セシル）がこのままで大人にならなければ良いのだが、ユークリッド」（一四八）というエクター神父の言葉は、彼が名実ともに聖賢の誉れが高い聖職者であるだけに、＜子供の時代＝楽園の時代＞を意味するものであり、作者の積年の思いを代弁するものである。キャザーが子供の時代を人生で最も幸福な時代と見なすのは、聖書の「楽園追放」が象徴的に示しているように、楽園とは「時の重荷」や「自己愛」を本質とするエロスとは無縁の世界であり、その楽土の世界に住むことを許されているのは無垢な子供しかいないからである。それは「たとえ（諸魂日のような）悲しみの日であろうと、十二歳の年頃では聖日が悲しかろうはずがない。その年齢の者には、死とか死に別れとか人生の苦しみとかいう不幸事もただ単に劇的な価値を持つのみであり、時という灰色の広がりの中にある強烈で心を動かす色彩としか思えないのである」（九十五）という語り手の言葉を見ても明らかである。

『岩の上の影』は「時の重荷」の非情とエロスの罪を身に滲みて知る作者によって夢想されたユートピア物語であり、子供というものに重要な役割と積極的な意味を付与している昔々の桃源の物語である。本作品を評して、ある批評家は「大人のために書かれた子供の物語」（リー 301）と述べている。にもかかわらず、セシルのイニシエーションが敢えて本文に挿入されているのは何故であろうか。それは、本作品の力点の一つが「豊かな命の源」であるヒロインの母性を賛美することにあるからである。少女セシルの母性がこの世で豊かな命を生み出すためには、彼女が何らかのイニシエーションを経ざるを得ないのは自明である。

ジャックに対する母性愛を通して十二歳の少女セシルが地上の聖母に譬えられていることは既に指摘したが、作者がセシルのイニシエーションを『迷える夫人』のニールの場合（二十歳）と違って十三歳の時点に設定し、性愛的要素を徹底的に忌避しているのは、＜命＞のみならず＜愛＞の源でもあるヒロインの母性、つまりセシルの母性愛がエロスの罪とは無縁の、無垢にして無私であることを意味するものである。換言すれば、生涯変わることなく「聖家族」の教えに従い、家族の絆というものを大切に生きていく＜生まれながらの母なる女性＞、それが本作品のヒロインなのである。十三歳の誕生日を迎えたあと、セシルがフランスの叔母から「一人前の娘の身支度」（二一三）をするようにと新調のドレスを贈られ、それを着る機会があるにもかかわらず、敢えて＜子供服＞姿で＜ジャックを守護する慈母＞の役を演じ通すのは、彼女の母性愛が大人になっても不変、つまり子供の時と同様に無垢にして無私であることを象徴的に暗示するものである。それを端的に実証するのが、第五巻「フランスからの船」の中で交わされるオークレール親子の対話の内容である。時は十月、所は菓種屋の屋内。その年の帰国を信じて疑わないオークレールは、日々その準備に追われる多忙の身である。父の仕事の切れ目を待って、セシルは切り出す。

「お父さん、私たちがフランスへ帰るとき、ジャックはどうなるのでしょうか。」

「勘弁しておくれよ。私は伯爵さまのことや自分のことで頭がいっぱいなんだ——とてもお前の小さな被保護者のことまで心配はできないね。」

「だけど、お父さん。あの子をほったらかしにすることはできませんわ。だって誰一人面倒を見る人がいないのですもの。フランスに帰っても、私はあの子のことばかり考えるでしょう。そうすれば、いつもたいへん不幸な気持ちになるだけですわ。」

「フランスに帰れば、すぐに小さないとこの友達が沢山できるよ。セシルにアンドレ、それからラッセル。いとこのアンドレがジャックの代わりにお前の心を満たしてくれるさ。」

「いいえ、お父さん。私の心はそんなものじゃありませんよ。」

彼女は素早く、反抗的とも言える口調で言い放った——それは、父の前ではこれまで一度も見せたことのない強いものであった。
(二二六—七)

と見てくれば、＜光の家族＞の真の主人公は誰であるかは自明である。それは、新大陸カナダの国を自分の母国として心の底から愛し、＜子＞に対する無私な母性愛に貫かれた女性セシルである（ちなみに、ヒロインがケベックに移住した時は僅か四歳であり、しかもケベックはフランスとは対照的に＜光の国＞である。したがって、彼女にとって、新大陸のニューフランスは二重の意味で＜去り難い母国＞と言える）。とはいえ、セシルが自分を慕う＜無力で哀れな子供＞のジャックをいかに深く愛しようと、十三歳の彼女が彼の面倒を見ることができるのはケベックに居る間だけである。それを思えば思うほど、セシルの心を苛むのは後に残されるジャックの行く末である。「私の一番の心配は（私たち親子が帰国した後の）少年ジャックのことです」（二三一）と切々と老司教に訴えるセシルの言葉は、彼女が紛れもなく聖母的な女性、自分に全面的な信頼を寄せる子供を愛し、慈しむ＜慈母＞であること確かな証左である。ここで「聖家族」の地上（世俗）版が本作品の究極的賛美と祝福の対象であることを思い見るとき、ヒロインの母性が将来豊かな実を結ぶためには、彼女の母性に見合う父性的男性が必要不可欠であるのは自明である。その点を踏まえた上で、本文の最終巻「臨終の伯爵」を見てみよう。

(八)

物語はフランス行き最終便の出港を間近に控えた十月の末から始まる。伯爵は今や七十八歳である。彼は今年こそ総督の任から免ぜられ、「彼をフランスに召還して、過去の功績に報いる立派な地位に就かせるという手紙が来るものと確信していた」（二三八）が、その「良き知らせ」はついに来なかった。伯爵のたび重なる請願にもかかわらず、彼の本国召還は今年もまた無視されたのだ。大西洋の彼方にあるアメリカ大陸の広大な植民地、ニューフランスの事情は母国ではなかなか理解してもらえない上に、ずる賢さが売り物の廷臣たちの中で、清廉潔白にして「率直にものを言いつぎる」（二五八）伯爵に王は無情である。「自分には廷臣らしいおべっか使いができない」（二三九）と伯爵は自認しているが、「おべっかが使えないと軍人も出世できない当節」（二三九）であり、しかも彼は余命の少ない高齢の身である。生きて母国に帰れる確証はほとんどないとするなら、オークレール父子を帰国させるのは今の内である。伯爵は薬種屋を総督邸に呼んで、机の引き出しから大金の入った革袋を取り出し、彼に帰国を勧める：「君にケベック行きを説得したとき、わたしは将来帰国させると約束した……その袋の中には君が国に帰って手頃な商売を始めるには十分な金が入っている。もしわしが君の立場にいたら、家財道具を纏めて明後日の船に乗るだろうよ」（二四一—二四二）。

伯爵の申し出に対して、オークレールは静かな声ではあるが何の躊躇もなく答える：「私は閣下と運命を共にするために、この国にやって参りました……閣下がケベックに残られる限り、私もこの地に残ります。それに、そんなものは不要でございます」（二四二）。伯爵の再三の説得にもかかわらず、オークレールは帰国の勧告と金の受け取りを拒んで官邸を辞去する。高齢の伯爵に万一のことがあれば、オークレールの帰国は極めて望みの薄いものとなる。にもかかわらず、彼は敢えて主人の伯爵と運命を共にする道を選んだのである。ここに「好人、善人、真の人」としてのオークレールの真骨頂を見ることができよう。結果はともあれ、薬種屋に負っていた懸案の義務を果たした後のある夜のこと、伯爵は不思議な夢を見る。

彼は夢の中でも眠っていて急に目が覚めた。夏になると、乳母がよく連れていってくれたオアズ河畔に近い、古い農家で子供として目が覚めたのだ。何か危険なことが自分の身に迫っているような気がして、驚いて目を覚ましたところであった。子供の彼はベッドから起き上がると、素足のままで庭に続く戸口へこっそりと近づいていった。戸は少し開いている。戸外の闇の中に、羽毛の帽子をかぶり、大きな長靴を履いているとても背の高い男が立っていた——まさしく巨人であった。彼の頭は男の長靴の天辺にも届かない。この巨大な男が一体何者なのか彼には全く見当がつかなくなったけれども、ただ家の中に入れてはならない、閉め出すことができなければ万事休してしまうということを知っていた。

(二四三—二四四)

夢や幻想がキャザー文学に於いて極めて重要な意味を持つことは、彼女の主要な作品、『おお、開拓者たちよ!』、『私のアントニア』、『教授の家』、『大司教に死は来る』を通観してみても明らかである。というのも、キャザーの描いた一連の小説は、「時の重荷」に捉われた彼女の精神の遍歴を多層的に反映する<意識のドラマ>であり、有機的連関を持つ<時間のドラマ>であるからである。『岩の上の影』を執筆時の作者が骨身に滲みて痛感していたことは「時の重荷」の非情であり、己の母性を犠牲にして手に入れた成功の虚しさである。そうした彼女の思いを色濃く反映しているのが上記の夢であり、その意味するところは「成功のパラドックス」による「樂園」への退行と母性の賛美である。これらのことを踏まえた上で、伯爵の見た「不思議な夢」の分析と解釈に入りたい。それには、(1) 彼が夢の中で子供に退行し、自分の家ではなく乳母の実家にいることは何を意味するのか、(2) 戸外の闇の中にいる、羽毛の帽子をかぶり、大きな長靴を履いている巨人とは一体誰なのか、(3) この巨人を閉め出すことができなければ何故に万事休するのか、という問いに答えてゆく必要がある。伯爵の人生を概観しながら順を追って考えてみよう。

軍人として大成しながら、「打ちひしがれそうな失望に静かに耐え(る)」(二三七) 失意のフロンテナック伯爵。ここに、処女作の『アレグザンダーの橋』以来キャザーが繰り返し描いてきた「成功のパラドックス」を読みとることができるが、彼の私生活も公生活と同様、不幸そのものである。伯爵の回想によれば、彼は生まれてこのかた乳母のノエミ以外に女性の愛というものを知らない寂しい人間である。語り手は次のように述べている。

ノエミは、彼が乳離れした時から学校へ通う年まで、彼の面倒を見てくれた。彼の母は心の冷たい人間で、子供には薄情な女であった。伯爵は夢から覚めながらベッドのカーテンの奥に身を横たえていたとき、おそらく年老いたノエミほど自分に愛情を注いでくれた女性はいないだろうと思った。もちろん全ての女性が妻のように彼を個人的に嫌悪していたわけではないにしても、しかし、どの側室も一時的にしか愛してくれなかった。心の優しさ、打算もなければ私心もない献身、というものを彼はついで知らなかった。知ることができない、というのが彼の宿命であった。だが、乳母のノエミだけは、彼の美しく、強い、小さな身体を愛してくれた。怪我をしたと言っては嘆き、病気の時は看護し、疲れた時には抱っこをしてくれた。年老いて身体を病む今、彼の心は、夢の中で、ノエミのもとへ、オワズ河畔の彼女の農家へと帰っていくのであった。

(二四五—二四六)

子供時代に伯爵が乳母のノエミに連れられ、彼女の農家を訪ねたのは八歳までであり、しかもその回数は僅か四回である。にもかかわらず、「(夢の中で) 子供の素足は床のあらゆる凹凸を避けて通った。暗闇の中でも躊躇することなく台所の土間から、高い敷居を越えて、居間の木の床を歩い

ていった。あらゆる家具の正確な位置が分かっていたので、家の中を飛ぶように駆けても決して蹴つまずくようなことはなかった」（二四五）という語り手の言葉は、子供の時にノエミの農家で過ごした夏の日々が伯爵にとって如何に幸福であったかを明白に示す証左である。と見てくれば、問いの（１）に対する答えは自ずと明らかである。「夢象徴の明らかな原因は抑圧と願望充足」¹⁶⁾にあり、「成功のパラドックス」とは、換言すれば＜時間のパラドックス＞であるからこそ、成功の虚しさを痛感する失意の伯爵が、夢の中で「人生最良の時」であった遠い昔の楽園の世界へと退行していったのである。では次に、問いの（２）＜戸外の暗闇の中にいる、羽毛の帽子をかぶり、大きな長靴を履いている巨人とは一体誰なのか＞について考えてみたい。改めてフロンテナック伯爵の人生を詳しく見てみる。

最初に、伯爵の「楽園の時代」が終わったのは八歳の時である。というのも、第一に、彼は小学校入学（全寮制？）と同時に乳母から引き離されたからであり、第二に、「オワズ河畔の古い農家はノエミの財産であったが、彼女の息子が結婚したとき、当時の慣習によって実権は嫁の手に渡った」（二四五）からである。次に、伯爵は欧州のみならずアメリカ大陸に於いても軍人として数々の勲功を立て、カナダ総督にまで登りつめた偉人であるが、彼が軍籍に入ったのは十五歳の時である。と見てくれば、フロンテナック伯爵の経歴は、二つの重要な点で『教授の家』の主人公セントピーター、換言すれば、作者の分身中の分身とも言うべき重要人物の経歴と重なってくる。というのも、セントピーターの人生は次の三つに大別できるからである。第一は、死の哀しみや思いとは未だ無縁の無時間的な楽園の世界に住んでいた八歳までの子供時代である。第二は、その幸福な楽園の世界から引き離されて「ほとんど死ぬような思い」をしながらも、その哀しみの体験に耐えて、現実の世界（時間の重荷と死）を受け入れた少年時代である。第三は、その現実の世界に愛の対象を見つけて、「意識的にせよ、無意識的にせよ、常に＜愛する＞という動詞を活用させる」「愛する人」、換言すれば、生の喜びを追い求める時間の肯定者に変身することによって、死に逆らい、死を否定して生きた青春以後の人生である。¹⁷⁾

セントピーターとフロンテナック伯爵の共通点は上記の点のみに止まらない。両者は「愛する人」としての公的生活のみならず私生活、換言すれば、夫・父としての「心のロマンス」に於いても共に苦杯をなめた人間である。最初に、伯爵は妻帯者である。にもかかわらず、総督邸で＜单身生活＞をしているのは「彼を個人的に嫌悪」している妻とは久しく別居の身であるからである。いかに愛のない夫婦といえども、十七世紀のカトリック教徒に離婚は御法度である。次に、伯爵には息子が一人いたが、その愛息にも数年前に下町の戦いで死なれ、家族と呼べる者はケベックに誰一人いない。「輝かしい失敗を重ねた」（二三九）あげく、異境の地で独り寂しく死んでゆく運命。これが「愛する人」として生きた伯爵の人生の末路である。己の生涯を回想すればするほど、伯爵の心中に去来するのは「世の中というものは二十歳の時に、いやそれどころか四十の時に、考えていたようなものではなかった」（二四七）という痛恨の思いである。

と見てくれば、軍籍に入って以来「愛する人」として歩んだ伯爵の人生は、究極的には否定の対象とならざるを得ないのは自明である。この＜「愛する人」として生きた大人の自己＞が伯爵の夢に現れた「羽毛の帽子をかぶり、大きな長靴を履いているとても背の高い男」なのである。それは、男が履いている「大きな長靴（large boots）」と遠い昔三歳のオークレールを怖がらせた伯爵の「とても大きな長靴（such large boots）」（十九）の符合や、＜夢の中の巨人＝「あの恐ろしい男」（二四四）＞という子供の恐怖を見ても明らかである。「巨人」が「子供」に敵対する否定の対象となっているのは、＜大人の自己＝「愛する人」＞と＜子供の自己＞に対する伯爵の評価が正反対であるからである。したがって、夢の中で＜子供の自己＞が必死になって＜恐ろしい巨人＞を閉め出そうとしているのは、自己の人生から「愛する人」として生きた時間の全てを閉め出し、乳母の農

家という楽園の世界で何時までも子供のままでおりたいという伯爵の切実な時間停止願望を意味するものである。

しかし「不思議な夢」の意味するところは、伯爵の時間停止願望のみであろうか。それだけではないことは、入り組んだ夢の設定や八歳の子供と雲突く大男では全く勝負にならない、という点を見ても明らかである。いくら子供が死に物狂いの努力をしようと、戸外の暗闇に居るく恐ろしい巨人が家の中に入ってくるのは確実であり、単に時間の問題でしかない。時の流れを止めることはできないのである。したがって、伯爵の見た夢は時間の停止願望と同時に、その「願望充足」が不可能であること、換言すれば、「時の重荷」に抗ってみても全く勝ち目はないことを意味するものである。以上の点を踏まえた上で、問いの(3)〈巨人を閉め出すことができなければ何故に万事休するのか〉について考えてみたい。

十五歳で軍籍に入って以来「愛する人」として生きた伯爵も今や八十に近い高齢であり、彼にとって時間は、もはや肯定の対象ではなく「重荷」以外の何物でもない。なぜなら、伯爵に許された時間は残り少なく、しかも、その終着点は悲哀と失望に満ちた孤独な死であるからである。と見てくれば、問いの③に対する答えは自ずと明らかである。「(恐ろしい巨人を)閉め出すことができなければ万事休してしまう」という子供の危機感、自分に死期が迫っていることを伯爵が意識の底で自覚していることを意味するものである。巨人に対する子供の抵抗は、伯爵が未だ「時の重荷」に抗う「愛する人」であることを示すものであるが、それは、帰国を勧告された日にオークレールが面前の伯爵に対して抱いた思い、「輝かしい失敗を重ねた生涯を追憶している人というより、むしろ自分の運命と新たに闘う計画を思い巡らしている人のように思われた。伯爵は剣を持って構えた剣士のような態度である。両肩から足の爪先まで意志と方針が満ち溢れている。意識せずとも、態度そのものに心の思いが表れているのだ」(二三九)という言葉を見ても明らかである。

とはいえ、伯爵が「愛する人」として生きられるのも夢から覚める途である。というのも、「不思議な夢」からの覚醒を境に、彼は「時の重荷」に抗う「愛する人」から「時の重荷」を甘受する〈死期の近い老人〉へと精神的に変身を遂げるからである。自己の見た夢を通して、「時の重荷」に逆らうことの無益を悟ったのである。いくら孤軍奮闘してみても、八歳の子供に巨人を閉め出すことなどできないのは火を見るよりも明らかである。「夢を見たあと、彼は日の明るい内に遺言書を作成することに決めた」(二四六)という語り手の言葉は、伯爵の〈変身〉を示す確かな証左である。生きる気力をなくした失意の老人に死は時間の問題でしかない。「不思議な夢」を見てから約一月後の十一月、〈自分の死後、心臓を母国に送って、一族の墓があるサン・ニコラ・デ・シャン教会の、彼が好きだった亡姉の隣に埋葬するように取り計らって欲しい〉という依頼をオークレールに託して、伯爵は誰にも看取られずに独りでこの世を去る。軍人としてカナダ総督にまで登りつめながら、フロンテナックが最後に求めたもの。それは母性の愛であり、家族との絆であった。では、伯爵に死なれたオークレール親子を見てみよう。

二人にとって、伯爵は経済的にも精神的にも力強い保護者、言ってみれば「彼らの頭上にある頼もしい屋根」(二五九)であった。しかし彼の死によって、その「頼もしい屋根」(二五九)が消失したのである。総督という強力な後ろ盾をなくしたあと、この身寄りのない土地で一体どうやって暮らしを立ててゆけばよいのか、セシルは不安でならない。語り手は、親子のつましい生活を次のように述べている。

砂糖に塩に葡萄酒、それに父の愛用するスペイン産の嗅ぎ煙草も、全て伯爵の蔵から来ていた。くわえて、移住民たちは薬代というものを、まず払ってくれないのだ。彼らは、一籠の卵とか鶏肉とか兎うさぎを持参すれば、薬種屋に対して大盤振る舞いをしたつもりである。(二六〇)

とはいえ、セシルの一番の心配事は伯爵に死なれた父のことである。というのも、「父は、これ迄ずっと伯爵の庇護のもとで暮らしてきた。伯爵こそ父の活動のほとんど全てであった——実際のところ、父は伯爵一人を頼りにこの土地に来た」（二六〇）からである。オークレールは「好人、善人、真の人」ではあっても、父性という観点から見れば、失格人間なのである。伯爵が亡くなった日の夜、「これで全てが終わりだ……私の生涯の仕事も、これで終わった……もうこれ以上長生きしたいとは思わない」（二六一）と、弱々しい溜め息をつきながら娘に語る彼の言葉は、その何よりの証左である。身寄りのない異境の辺境地で「将来への準備も計画も安定もない生活が恐ろしい」（二五二）のは父も娘も同じである。だとするなら、オークレールには、彼一人を頼りとして「新しい時代に生きなければならぬ」（二六一）娘のためにも、弱音など吐いている暇がないのは誰が見ても明らかである。にもかかわらず、彼は帰国の夢に取りつかれて以来、「家長としての務め」（二六七）すら等閑にしてきた父性失格の人間である。頼みの綱とも言うべき父親がこのような状態では、セシルも前途に希望が持てず、何をやる気力もなくなるのは当然である。親子は夕食も取らずに、ただ黙したまま、暖炉の前でじっと座り続けるのみである。

この打ち沈んだ舞台の雰囲気を一変させるのが、夜半に訪ねてくるピエール・シャロンである。伯爵重体との報に接して、オークレール親子のためにモンリオールから駆けつけてきたのである。男らしくて頼り甲斐のあるピエールと父性失格の父親。「頼もしい屋根」（二六五）を再度取り戻した幸福な安堵感に浸りながら、セシルがこの日初めて思い知ったことは「父がピエールを愛するのは、彼が伯爵を愛していたのと同じ理由である……この二人は、父自身持つてはいないが、しかし彼が最も賞賛する特質を兼ね備えている」（二六五—二六六）ということである。なるほど「生身は死に身であり、誰にも明日の運命は分からない。それが人生というものさ……だから、できる間は少しでも楽しく生きることだ」（二六七）と明言するピエールの生き方は、「愛する人」として生きた伯爵の生き方とは明らかに異なるものである。しかし、カナダ総督として「自己の任務を立派にやり遂げた」（二三八）伯爵と「愛情深く、恐れを知らない」ピエールは、＜愛＞と＜力＞を兼ね備えた父性的男性という点では同じである。オークレール夫妻がピエールを、新旧両世界の美質を併せ持つ理想のカナダ人、「大いなる森の自由なフランス人」と見なしていたことは既に見た。頼もしい来客を迎え、心ゆくまで夜食と会話を楽しんだあと、幸福な思いで床についたセシルの胸中に去来するのは、父性的男性としてのピエールの偉大さと彼に対する尊敬である。

セシルは二階の寝室で、いつしか重苦しい不安感も孤独感も忘れ去って眠りに入った。彼女が忘却の眠りに陥る寸前に考えていたのは、まるで家族の一員であるかのように、今この家で休んでいる、愛情深く、恐れを知らない友人ピエールのことであった。彼には、伯爵のように、王位の後ろ盾もなければ（後ろ盾とはいっても、伯爵の場合はお話にならない弱いものではあったが）、お上の威光もない。しかし、彼には権威がある。この国を知り、この国の人々を知っていることから来る一種の力がある。それは、力であるとともに、一種の情熱でもあった。セシルにとって、ピエールの勇気と誇りは、フロンテナック伯爵のものよりも更に一段と素晴らしいものに思われた。

（二六七—二六八）

内に秘めた豊かな母性の故に地上の聖母に譬えられ、ニューフランスの地を自分の母国として愛するヒロインのセシルと、その母性に最適の父性を体現するカナダ人青年ピエール。本作品の究極的賛美と祝福の対象である地上（世俗）版「聖家族」を創建するのに必要な条件は揃ったのだ。後は二人が結ばれるだけである。では最後に、「エピローグ」を見てみよう。

(九)

終章のエピローグは、フロンテナック伯爵が亡くなってから十五年後の一七一三年八月十七日、ケベックの住民が官民総出で、十三年ぶりに帰任するサン・ヴァリエ司教を歓呼して出迎える場面から始まる。ラヴァル老司教も既に鬼籍に入り、ケベックでは司教不在の状態が続いていたが、二代目司教のサン・ヴァリエは祖国に帰国中に政争に巻き込まれ、イギリスとフランスで長い幽閉生活を送っていたのである。最初に、〈それから十五年後〉という終章を設けた作者の意図は、時の流れによる明暗を描くことによって、『岩の上の影』という桃源の国の孝行物語に結末をつけるためである。換言すれば、この章がないと、孝行物語としての本作品は画竜点睛を欠くことになる。というのも、終章でサン・ヴァリエ司教とセシルの一大変身（更にはジャックの変身までも）が明らかにされているからである。具体的に言えば、作者は、傍観者であるオークレールの目を通してサン・ヴァリエの変貌著しい姿を読者に紹介したあと、舞台を〈それから三日後の薬種屋〉に移し、両者を対面、対話させることによって、(1) 二代目司教が外面的のみならず内面的にも全く別人に変身していること、(2) セシル(二十八歳)がピエールと結婚して「未来のカナダ人」(二七八)である四人の男の子を持つ幸福な母親になっていること、(3) ジャック(二十二歳)は外国航路の船員となり、ケベックに寄港した時には、いつも薬種屋の二階にある元セシルの部屋で寝泊まりすること、更に言えば、性悪女であった彼の母親は五、六年前に救貧院で死亡したこと、等々を読者に知らせる形式を取っている。第二と第三の点は説明の必要がないとしても、サン・ヴァリエ司教の「変身」が何故にオークレールの幸福に繋がるのであろうか。その点について司教の変貌そのものから見てみよう。それを読者に紹介するのは、老いさらばえた司教と同年輩でありながら、彼とは対照的な人物、「時の重荷」というものを感じさせないオークレールである。

老薬種屋のユークリッド・オークレールはマウンテン・ヒルにある店の戸口に立って司教の帰国行列を眺めていたが、サン・ヴァリエ兎下の変貌ぶりには愕然とした。十三年前、ここからフランスに出発したとき、司教は四十七歳で、若さに満ち溢れていた。しかし六十歳で帰ってきた今、年老いたヨボヨボの老人である。オークレールの記憶にある、この聖職者の美男で高慢な身体的特徴は跡形もなく消え去っていた。このノロノロと、前屈みになって、びっこを引きながら坂を上ってくる老人には、よくこの道を横切つて司教館の階段を上がっていった、スマートで多少芝居がかった昔の面影は何処にも見られなかった。狭くて落ち着きのなかった両肩には肉が付いて、猫背になっていた。司教の頭の運びには既に慣れた人間を思わせるところがあつた。(二七〇)

司教が帰ってきたこの日、彼の変貌ぶりを目の当たりにすると、政敵でさえ心が優しくなつた。司教は昔の自信に引き替えて、重い卑下のマントを身に纏っている人のように思われた。まるで過去の過ちを踏み締めてでもいるかのように、本聖堂への坂を重い足取りで上っていった。

これに対して薬種屋のオークレールは、全くと言っていいほど変わってはいなかった。家の中にはばかり居るために、ひ弱そうな顔色は少し青白くなつていたが、司教を老人にした同じ歳月は、この薬種屋には穏やかに過ぎていったのである。彼の店さえ昔のままであつた。(二七二)

本文に登場するサン・ヴァリエ司教は、フロンテナック伯爵やラヴァル老司教とは対照的に端役であり、しかも悪評高い疎まれ役であつたが、それは「矛盾だらけの人」(一二一)とか「オークレールは、どうしてもサン・ヴァリエが好きになつた試しがなかつた。新司教の敬虔の念を疑うも

のではないが、しかしその思慮分別の程には承伏しかねた。彼は性急、軽率、移り気であった……まるで女のように気が変わりやすくて気まぐれなのだ。実際、この司教は、その仕付けの大部分を婦人の下で受けたのであった」（一二二）という語り手の言葉を見れば明らかである。サン・ヴァリエ司教が心身ともに別人に変身を遂げた最大の理由は、国事犯として母国で過ごした幽閉生活にある。たとえ彼の政敵が仕掛けたものにせよ、サン・ヴァリエ司教は、敬して止まない国王によってカナダでは有害人物との烙印を押されたのである。語り手は「フランスに拘留されている間に、我意の強い司教も心を入れ替え、悲しみに沈む人となった」（二七一）と述べている。彼が十三年ぶりに任地の司教区に帰ることができたのも、公式に自己の非を認め、カナダ帰任の請願を繰り返した結果である。母国で幽閉されている間に、サン・ヴァリエ司教は一大変身を遂げ、心身ともに別人となってカナダに帰ってきたのである。

それから三日後、司教は従者も連れずに一人で薬種屋を訪ねる。この薬種屋の店が終章でも物語の一番舞台であるが、ただし主役はサン・ヴァリエとオークレールの二人である。前者は「変化」を体現する人物であるのに対して、後者はその反対であり、しかも彼の店まで昔のままである。十三年ぶりに再会した薬種屋からセシルやジャックの近況を聞いた後で、サン・ヴァリエはオークレールに故国の不穏な政情と社会不安について語り、「貴方は何の変化も起こらない、この土地に残られて賢明でしたよ。貴方の所では、何もかも昔のままだ」（二七七）と心から薬種屋を祝福する。波瀾に富んだ十数年の時の流れは、サン・ヴァリエを「変化そのものを愛する」（一二二）人から「変化のないことを祝福する」人へと一変させてしまったのである。以上の点を踏まえた上で、この司教の変身がオークレールの幸せと如何に結び付くのか、という点について時・空の観点から見てみたい。最初に、空間の観点から見てみる。

既に指摘したように、アメリカ大陸のニューフランスが総督と司教という二大指導者を頂点とするヒエラルキー社会であると同時に、「聖家族」の信仰に貫かれた「恵みと救いの土地」であるとするなら、この国で司教となる人物はラヴァル老司教のように教区民の敬愛の対象でなければならないのは自明である。だとすると、変身前のサン・ヴァリエは、新生カナダの司教としては完全に失格である。終章が、心身ともに別人に変身した二代目司教の帰任歓迎の場面から始まっているのは意味のあることであり、ひいてはオークレール個人の幸福にも繋がるものである。語り手は「二人は、心の温かさで友愛を通わせて無言のまま腰を下ろしていた……オークレールは、いつしか昔の反目など忘れていた」（二七九）と述べている。では次に、時間の観点から見てみる。

サン・ヴァリエの一大変身は、彼のヨーロッパ、とりわけフランスでの生活がいかに苛酷であったか、ということを実証する証左であるが、フランス自体の国情はどうなのであろうか。母国の事情を知りたがるオークレールに、司教は答える：「私たちは新しい世紀の初めにいますが、しかし時代と世紀が何時も一致するとは限らないものです。故国のフランスでは古い時代は滅びを迎えようとしているのに、未だ新しい時代は生まれてこないのです。長い間監禁されている間に、イギリスでも同じ思いを抱きました。三十年前の我が国王のような人物は今や世界の何処にも居ないのです。あちらの国々で起こっている変化は全て、古いものが益々古くなる、というだけなのです」（二七七）。政情不穏と社会不安が渦巻く中で、新しいものが何一つ生まれず、「ただ古いものが（滅びに向かって）益々古くなるだけ」の世界とは、換言すれば、非情な「時の重荷」に支配された闇の世界である。時間が「創造の媒体」ではなく「破壊」でしかないとするなら、時の流れによって生み出される変化が断じて肯定の対象には成り得ないのは自明である。オークレールの祖国フランスは、昔と同様、非情な変化に満ちた「闇の国」であり、その前途には未だ一条の光もないのである。

サン・ヴァリエがその人生でフランスを含めた広い世界のみならず、時間の持つ意味をも深く理

解できる人間となってケベックに帰任したからこそ、彼がオークレールに語った言葉：「貴方は何も変わらない、この土地に残られて賢明でした……貴方のお孫さんたちは私たちの時代よりも、もっと良い時代を見ることになるでしょう」（二七七-二七九）には、強い説得性と未来に対する希望がある。サン・ヴァリエ司教が帰ったあと、「訪問客が語ってくれた多くのこと」（二七九）を回想、黙考しながら、いつしか深い幸福感に浸ってゆく薬種屋の姿はその紛れもない証左であり、同時に『岩の上の影』という孝行物語の最後を飾るラスト・シーンでもある。「山の手」に住む娘家族の家に向かう前に、しみじみと己の幸せを嘯みしめるオークレールの胸中を、語り手は次のように述べている。時は一七一三年八月二十日、所は十年一日のごとく「何も変わらない」極北の岩山の町、ケベックの薬種屋店内である。

自分は、何も変わらないこの地で老年を過ごし、国王の死も、長い摂政政治から生まれるであろう諸々の害毒も及ばない国で、孫たちが大きくなってゆくのを見られて、本当に幸せな身の上だと思った。
（二八九-二八〇）

(十)

「十年一昔」だとするなら、『岩の上の影』は、まさに「むかし、むかし」から始まり、「めでたし、めでたし」で終わる童話形式に則った心の温まる伝説風物語であり、作品技法も老成した作家の力量を遺憾なく示す見事なものである。とはいえ、終章で主人公の人生に最終評価を下すという極めて重要な役を務めるサン・ヴァリエ司教と作者自身の大きな共通点を思い見るとき、何も変わらぬ世界で平穩無事に日々の生を営む庶民の生き方を称え、祝福する老いた司教の人生観や価値観は、紛れもなく作者自身のものである。ここにキャザー文学に於ける本作品の異端性があり、この異端性こそ『岩の上の影』の「弱さ」と作者の衰えを明白に示すものである。最初に、サン・ヴァリエ司教と作者の共通点から見てみたい。

両者はケベックに来る前に、変化に満ちた国で非情な「時の重荷」に苦悩した体験を有するのみならず、共に五十代で否応なく前非を悔いたあと、心身ともに別人に変身した人間である。『教授の家』（一九二五年、作者が五十一歳の時に出版）は、現実の世界と時間に対する徹底的な幻滅と絶望の果てに、「神から自由なナポレオン」から「セント・ペテロ」へと百八十度の変身を遂げる開拓者教授ゴッドフリー・ナポレオン・セントピーターの諦観に満ちた悟りの姿を描いているが、この教授こそ他ならぬ作者その人なのである。しかしキャザーの不幸は、これだけでは終わらないのだ。なぜなら、彼女は、これから数年を経ずして、人生最大の不幸な時期を迎えることになるからである。意識的であれ無意識的であれ、作者は、心身ともに別人になったサン・ヴァリエ司教の変貌ぶりを克明に描いていたとき、実は己の自画像を描いていたのである。一九三〇年十二月（『岩の上の影』が上梓される八か月前で、キャザーは五十七歳）、彼女がアメリカ文芸協会からハムリン・ガーランド賞を授与されたとき、その式典に出席していた作家のハムリン・ガーランドは、日記の中で「ウィラ・キャザーは演壇にいた。なのに、私にはそれが彼女だとは分からなかった。彼女はそれほど一変していた。不器量で、背が低く、不格好な年寄り女であった……彼女は全くの別人になっていた」（ウッドレス 四二二）と述べている。往年の面影もない、老いさらばえたサン・ヴァリエ司教が作者の分身の人物であり、代弁者であるとするなら、＜変化を愛する人＞から＜変化を厭う人＞への一大変身を明確に示す彼の祝福の言葉：「貴方は何の変化も起こらない、この土地に残られて賢明でしたよ」、換言すれば、本作品の最終結論は、一体何を意味するのであろうか。次に、その点について考えてみたい。

変化という観点からキャザー文学を通観してみると、この作家は——『教授の家』を境にエロスの世界に背を向け、カトリシズムへの傾斜を深めて行くにしても——処女作（『アレグザンダーの橋』（一九一八）から最後の大作（『大司教に死は来る』（一九二七）に至るまで、終始一貫して「変化」を創造する開拓者とその人生を称え続けてきたことが明白となる。『私のアントニア』（一九一八）、『迷える夫人』（一九二三）、『教授の家』（一九二五）、『大司教に死は来る』の四作品がキャザー文学の傑作であることに誰も異論はなかろうが、作者はこれらの作品の中で、西部ネブラスカの荒れ地を豊かな田園に変えた開拓移民のアントニア・シメルダ・クーザック、未開の大西部に鉄道を敷設したダニエル・フォレスター大尉、十五年の歳月をかけて八巻の大著『北アメリカに於けるスペインの冒険家たち』を書き上げたゴッドフリー・ナポレオン・セントピーター教授、更に十九世紀のニューメキシコの町サンタ・フェに新大陸最初のロマネスク様式の大聖堂を建立したジャン・マリー・ラトゥール大司教と、開拓者としての彼らの生き方に惜しみない賛辞を呈している。彼らは全てアメリカ大陸の未開の辺境という広大な蕃地を舞台に、「変化」の創造に生きた非凡な「行動の人」であり、作者の理想とする人生哲学を具現する人物である。

これに対して、『岩の上の影』で最終的に祝福されているのは、キャザー的偉人とは凡そ程遠い父親と、作者が歩んだ人生とは正反対の人生を歩む孝行娘であり、しかも彼らが日々の生を営む岩山の町は、人間を寄せ付けぬ荒蕪たる不毛の原野や砂漠ではなく、変乱の旧大陸からは遠く離れ、「ヨーロッパ人を窒息、絶滅させる」（七）未開の原始林からも隔離したく安全で、平穏な閉ざされた空間である。と見てくれば、『岩の上の影』が正統的キャザー文学の中では正真正銘の＜異端＞であり、この異端性にこそ本作品の弱さと「時の重荷」に打ちのめされた作者の衰えがあるのは自明である。キャザー的偉人であるフロンテナック伯爵やラヴァル老司教、それに聖女のジャンヌ・ベルの人生が例外なく不遇で終わっているのは、その事実を裏付ける確かな証左である。

開拓者たちの栄枯盛衰の姿を見つめながら、常に彼らの生き方を称え続けてきた作家キャザー。その彼女が最後に悟った人生哲学とは、己が背を向け、否定してきた生の営みにこそ人間の本当の幸せがある、という悲劇的なものであった。本作品の人物を用いて換言すれば、彼女がジャンヌ・ベルの人生ではなく、セシルのような生き方を選んでいたら、今は亡き最愛の父に親孝行ができたのみならず、彼女自身も幸福になれたのであろうに、という仮定法過去完了の願望であり、したがって現実の世界では実現不可能な痛恨の思いである。作者の伝記事実とこの作者の特質から判断するなら、その仮定法過去完了の願望を現実には何処にも存在しない昔々のニューフランスの町ケベックを舞台に成就させたのが本作品である、と言えよう。だとすると、どこかで時が止まっているように「変化とは無縁」の「岩山」の町で更にタイム・カプセルに乗り換え、現実から完全に遊離した桃源郷の世界に逃避し、仮定法過去完了の願いを成就させる心身ともに老いた作家に、もはや「時の重荷」に抗う力がないのは自明である。しかし、人生最大の不幸に見舞われた彼女の本当の悲劇が始まるのは、この作品を完成させた後である。というのも、執筆終了とともに、彼女は自らの想像力によって作り上げた幻の桃源（不易不動の「岩山」の世界）から、仮定法過去完了の世界にしか存在しない幸福なユートピアの世界から、変化に満ちた非情な現実世界（「時の重荷」に支配された「影」の世界）へと戻ってゆかなければならないからである。

引用文献

Ambrose, Jamie. Willa Cather. Oxford: Berg, 1988.

Lewis, Edith. Willa Cather Living: A Personal Record. Lincoln: University of Nebraska Press, 1976.

- Woodress, James. Willa Cather: A Literary Life. Lincoln: University of Nebraska Press, 1987.
- Rosowski, J. Susan. The Voyage Perilous: Willa Cather's Romanticism. Lincoln: University of Nebraska Press, 1986.
- Stouck, David. Willa Cather's Imagination. Lincoln: University of Nebraska Press, 1975.
- Skaggs, M. Maguire. "Cather's Use of Parkman's Histories in Shadows on the Rock." Ed. Rosowski, J. Susan. Cather's Studies, 2. Lincoln: University of Nebraska Press, 1993.
- Lee, Hermione. Willa Cather: Double Lives. New York: Pantheon Books, 1989.
- Thomas, Susie. Willa Cather. London: Macmillan, 1990.
- Zabel, Morton. "Willa Cather: The Tone of Time" Ed. Schroeter, James. Willa Cather and Her Critics. Ithaca: Cornell University Press, 1967.
- Jung, G. Carl. "Approaching the Unconscious." Man and his Symbols. Ed. Jung, G. Carl. London: Aldus Books, 1979.
- Cather, Willa. My Antonia. Boston: Houghton Mifflin, 1946.
- Cather, Willa. The Professor's House. New York: Alfred A. Knopf, 1925.
- Cather, Willa. The Shadows on the Rock. New York: Random House, 1971.
- Cather, Willa. Death Comes for the Archbishop. New York: Alfred A. Knopf, 1927.
- Cather, Willa. Willa Cather in Europe: Her Own Story of the First Journey. New York: Alfred A. Knopf, 1956.
- Cather, Willa. Obscure Destinies. New York: Alfred A. Knopf, 1932.
- キャザー、ウィラ。『岩の上の影』山屋三郎訳、モダン日本社、1941。
- 榊田隆宏。『ウィラ・キャザー 時の重荷に捉われた作家』、大阪教育図書、1995。
- 坂本堯。『カトリックと日本人』、講談社新書、1973。
- ベルクソン、アンリー。『物質と記憶』高橋里美訳、岩波文庫、1996。
- 新村出編。『広辞苑』、岩波書店、1983。
- 小稲義男他編。『英和大辞典』第五版、研究社、1980。
- ラム、チャールズ。『エリア随筆』戸川秋骨訳、岩波文庫、1988。
- ブラウン、O. ノーマン。『エロスとタナトス』秋山さと子訳、竹内書店、1982。
- 『聖書』、日本聖書刊行会、1970。
- 桑田秀延他編。『キリスト教大辞典』改訂新版、東京：教文館、1977。
- 竹下節子。『聖母マリア〈異端〉から〈女王〉へ』講談社、1998年

注

- 1) Cf. Jamie Ambrose, p. 121; James Woodress, p. 391.
- 2) Cf. Lewis, pp. 56-57; Woodress, p. 160 and p. 492; Willa Cather, Willa Cather in Europe: Her Own Story of the First Journey, p. 128-141.
- 3) Shadows on the Rock (1931; New York: Vintage Books, 1971), p. 3. 本書に於ける『岩の上の影』からの引用は全てこの版により、その訳文の後に()を付し、頁数を記す。訳文は山屋三郎訳『岩の上の影』を利用して頂いたが、前後の文脈の関係から一部言葉を変えたことをお断りしておきたい。
- 4) Cf. My Antonia, p. 322: "I [Jim Burden as Cather's persona] wished I could be a little boy again, and that my way could end there."
- 5) 開拓者の第一世代と第二世代に対するキャザーの対照的評価については、拙著『ウィラ・キャザー 時の重荷に捉われた作家』、pp. 63-64を参照のこと。
- 6) 三省堂の『クラウン仏和辞典』(1978)によれば、オークレールとは au (at the or to the) +clair の意味である。
- 7) 『キリスト教大辞典』、p. 550: 「逝去せるすべての信徒を記念する日。諸聖徒日の翌日すなわち11月2日。オーディロ(クルーニ)が彼の修道会に命じて守らせた(998)ことから一般に普及した。カトリック教会では諸死者の記念日と称している」。
- 8) Cf. My Antonia, pp. 56-61.

- 9) ブラウン、p. 55：「エロスとは根本的に自己愛的であり、自己を愛することである」。
- 10) Cf. Cather Studies, 2, pp. 143-146.
- 11) 『ウィラ・キャザー 時の重荷に捉われた作家』、pp. 26-34を参照のこと。
- 12) Cf. Cather Studies, 2, p. 149: “. . . Parkman’s facts that bounties were given to each girl who married before the age of sixteen (Regime 1262) and that fathers whose daughters reached sixteen and were still unmarried were fined.”
- 13) 『聖書』（日本聖書刊行会、1970）、p. 120. 本書に於ける『聖書』からの引用は全てこの版による。
- 14) キャザーの「成功のパラドックス」の詳細については、『ウィラ・キャザー 時の重荷に捉われた作家』第一章を参照のこと。
- 15) 『エリア随筆』、pp. 251-258 を参照のこと。
- 16) “Thus far, nobody can say anything against Freud’s theory of repression and wish fulfillment as apparent causes of dream symbolism,” from Carl G. Jung, ‘Approaching the Unconscious,’ Man and his Symbols.
- 17) 『ウィラ・キャザー 時の重荷に捉われた作家』、p. 174.

平成10年（1998）年9月24日受理

平成10年（1998）年12月25日発行

